聖徒の道

SEITO-NO-MICHI

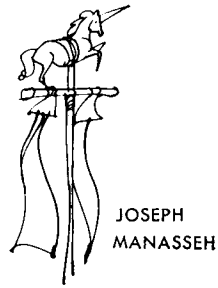
一九五八年三月十七日第三種郵便物
認可（毎月一回一日発行）
第六巻第十一号　一九六二年十一月
一日発行

11 1962

末日聖徒イエス・キリスト教会

The Seito no Michi

Volume 6, November 1962, Number 11



In this Issue

A Prophet's Voice: The Reality of Jesus Christ …… President David O. McKay…649

President's Message …… President Dwayne N. Andersen…654

Your Question: How can First Nephi 3:7 and Doctrine and Covenant 84:4 be reconciled? …… President Joseph Fielding Smith…658

Lectures on Faith (at Kirtland, Ohio) (2) ……661

A Bible Seminar (at Tokyo Central Branch) (2) ……664

You Can find Light and Happiness … (to the Members of our Mission) ……668

A Letter to an Investigator (3) ……670

Branch News ……672

Kanazawa, Kōfu, Muroran, Nagoya, Okamachi, Tokyo South, Nishinomiya

A bit of Salt (1) ……676

A Music Corner (1) ……677

Church Articles ……678

Sunday School Guide for J.S.S Children (for December)

Sunday School Guide (for December)

MIA Leader (for December)

Aaronic Priesthood: Branch Teaching Lesson (for November) ……684

Mission Headquarter News ……690

Mission Mother's Message ……691

Relief Society Lessons ……700

Literature—Theology—Visiting Teacher Message—Work Meeting

GOSPEL IN ENGLISH (for stundying Gospel in English) ……709

聖徒の道

第 6 巻
第 11 号

神の心を実現せよ
それが
人間に与えられた
最大の幸福である

11 月号

写真ニュース

東京北支部教会堂建築くわ入れ式

9 月 30 日、北支部待望の教会堂建築がいよいよはじまった。この日、サーヴィスメンのモルモンをはじめ多くの会員がつめかけ盛大にくわ入れ式が挙行された。

東中央地方部第Ⅱ地区大会（甲府、松本）

9月8日（土）ＭＩＡは小学校のグランドを借りてキャンプファイヤーが開かれた。9月9日（日）伝道部長御夫妻、佐藤竜猪兄弟をお迎えし一般大会が開かれた。（松本にて）。

金沢支部最近の話題

右、扶助協会、中井姉妹を中心としての仕事会

下、ＭＩＡ主催のハイキング「倉ケ獄」登山

名古屋支部

新しくバプテスマフォントができ支部の中でバプテスマができるようになりました。

日米親善盆踊り大会

7月7日、伝道部系図委員会主催の下に、東京西支部の庭園で資金獲得のための盆踊り大会が開かれた。150 名近くの日米両会員が入りみだれて一体となり時の経つのも忘れて楽しく踊り、非常に盛会に成功を納めた。

幼い天使、真由美ちゃん昇天

全く天使さながらの姿で大勢の横浜支部の兄弟姉妹たちから愛されていた佐々木真由美姉妹は、お母さんに手をひかれて横断歩道を渡っている時、無免許の暴自動車にはねられ集まった兄弟姉妹の輸血の準備も空しく7月11日1時過ぎ昇天された。誰れかこの運転手に対して義憤を感じないものがあろうか。けれど「父よ彼らを許し給え」といわれた主の御心を体する姉妹は、血の涙をぬぐって法廷でかの運転手に何のうらみも持ってないことを表明されたそうである。

目次　聖徒の道　一九六二年十一月号

予言者のことば
イエス・キリストの実在　大管長　デビド・O・マッケイ……649
伝道部長メッセージ　ダワエン・N・アンダーセン……654

質疑応答
ニーファイ第一書第三章七節の聖句と、教義と聖約第八十四章四節の聖句とはどうして調和させることができるか　ジョセフ・フィールディング・スミス長老……658

信仰講話　第二講……661
「信仰の目的(対象)」について

会員のみなさまへ　―光明と幸福はあなたの中にある―
あなたに光明と幸福を……668

求道者のみなさんへ
ある求道者への手紙(三)……670

ある聖研（聖書研究会）より ―ルカ伝七章― ……664

アロン神権　ブランチ・ティーチング・レッスン（十一月用）……683

子供の日曜学校ガイド（十二月用）……678

日曜学校ガイド（十二月用）……680

MIAリーダー……684

練習の讃美歌（十二月用）……714

伝道部長夫人メッセージ……ペギー・ヒュイシ・アンダーセン……691

母親ルシイ・マックの語る

ジョセフ・スミスの生涯（二）……扶助教会文学用レッスン……694

扶助協会レッスン……700

神学、訪問教師のメッセージ、仕事会

英会話テキスト―英語の福音……709

支部だより……672

写真ニュース……

ちょっとひといき《寒蛙・音楽の窓》……676

予言者のことば

イエス・キリストの実在

大管長　デビド・O・マッケイ

もしも私たちが霊を向上させたいとねがい、この世とこの世のものよりも高く上りたいとねがうなら、あなたも私もイエス・キリストの実在を感じ取らなくてはならない。またあなたも私もイエス・キリストの使命がまがいものでなく本物であることをこころから悟らなくてはならない。

現在、とくに危機につぐに危機をもってしているいまの時代に、世の人々の必要としているところは、「ガリラヤの人」イエスを単に最大の偉人であると思っているだけではたらないことが明らかである。真に欠くべからざるものは、イエスがわれらの主なる「救い主」であり神であると信ずる信仰である。

それこそ使徒ペテロが「なんじはキリスト、生ける神の子なり」（マタイ伝十六〇十六）と断言したときにけいけんした信仰である。それこそパウロが囚人としてアグリッパ王のまえに立って、キリストがパウロにあらわれたまい「なんじが迫害するイエスなり」（使徒行伝九〇五）と仰せになったとあかしをしたとき、パウロのあかしをふるい立たせた信仰である。またそれこそ、うたがいぶかいトマスに「わが主よ、わが神よ」と言わせた信仰である（ヨハネ伝二十〇二十八）。

私はかの性急な使徒ペテロと共に「他の者によりては救を得ることなし、天の下にはわれらの頼り

て救わるべきほかの名をたまいしことなければなり」（使徒行伝四〇十二）ということをこころから信ずるものである。その時に、十字架にかけられて天にのぼりたもうたキリストは、ペテロにとって実在のキリストであった。キリストは昔もいまも少しもかわらず実在である。

「人間の進歩」という統一された哲理の中には「神の子」イエス・キリストの降臨という考えが入っている。「神の子」イエスは、私もあなたもいつかは成れる「神」でありながら、私やあなたとおなじような肉体にやどりたもうた。霊としての人間が進歩発展をしてゆくとき、私たちが悟りさえすれば、そこにある必要かつ明確な段階がある。

霊がつよくなってゆくにひつような第一の段階は自由を自覚することである。これこそ、キリストがこの地上における使命をお受けになったときに始まった原則である。それは「自由意志」であって個人の自由にとって根本的なものである。最初主なる神は、地上に行って人類をあがなう者はないかとお聞きになった。するとこれにこたえて一人が「われをつかわしたまえ。われ万人をしてわが言のごとく為さしめん。されどその栄光をわれにたまえ」と言った。また別の一人がこたえて言った「われここにあり、われをつかわしたまえ。その栄光父なる神にあれ」と。父なる神は、各々の人間に自由意志という権利をあたえたいと思っておいでになった。そこに霊の進歩発展のはじまりがある。神は人間がみな自分のようになるのを欲しておりたもう。しかし、そうするには神はまずすべての人間を自由にさせなくてはならない。まことにそれは自由の観念である。

あなたは心のままに行うことができる。すなわち人生のうちで最高最良のものを受け入れることもできるし、またこれをすてることもできる。また世の人の利己主義、にくしみ、敵がい心などに同意することもできるし、またはこれに同意しないこともできる。動物的本能は、自分の利益を得るためにあなたをして隣人をおしつぶさせる。もしものぞむならその方をとりなさい、さもなければ高く昇る道の方をえらびなさい。

第二の段階は克己自制を会得することである。イエスがこの世で導きとめぐみの施こしをはじめたもう前に、イエスは誘惑にたえ得ることを証明なさった。イエスは誘惑を受けても、一度もそれにま

けず、かえって「雄々しかれ、われすでに世にかてり」（ヨハネ伝十六〇三十三）と最後に仰せになった。

あなたは、単に快楽としあわせとを得ようとして肉欲にまけてはならない。もしも肉の欲にまけるなら、あなたの求めているしあわせは、手ににぎったときにくだけ散るしぼんだ花であることを知るにちがいない。人があやまった欲を満足させようとすれば際限がない、ついには身を亡ぼすにちがいがないのである。

第三の段階は義務の観念である。この義しい徳を向上発達させる力になるのはイエス・キリスト御自身であって、その模範はつねに最高の模範である。まことにイエス・キリストは世の人のために自らの生命をお与えになった。「狐は穴あり、空の鳥はねぐらあり、されど人の子は枕するところなし」（マタイ伝八〇二十）とは有名な聖句である。このようにイエスは自らの安楽とひつような物までぎせいにして「汝らのあだを愛し、汝らを責むる者のために祈れ」（マタイ伝五〇四十四）、「わが兄弟なるこれらのいと小さき者の一人になしたるは、すなわちわれに為したるなり」（マタイ伝五〇四十四）、「兄弟にうらまるる事あるを思い出さば、まずゆきてその兄弟と和睦し」（マタイ伝五〇二十三―二十四）と万人に訓戒をなさった。これはまことに壮厳な真理であって、人がこれを受け入れてその通りにおこなうなら、世界いずれのところへ行っても解決されない困難はないであろう。「救い主」はさらに進んでこころにうらみをもっている者をいましめて「この故に汝もし供物を祭壇にささぐる時、そこにて兄弟にうらまるる事あるを思い出さば、供物を祭壇のまえにのこしおき、まず行きてその兄弟と和睦し然る後来りて供物をささげよ」（マタイ伝二十三―二十四）と仰せになった。

世界中の人間がこの真理を受け入れて実行するなら、戦争はおこなわれないにちがいない。

隣人に奉仕ができるなら、第四の段階である「キリストと義しきことへの献身」は一層容易になる。イエスはゲッセマネの園で最大の危機に直面されたときに「父よみむねならば、この酒づきをわれよりとり去りたまえ。されどわがこころにあらずしてみこころの成らんことを」（ルカ伝二十二〇四十二）と仰せになった。これこそ神のみこころに「我」をまったく服従させた一つの模範である。これ

より何週間も前にイエスはこれとおなじ真理を逆説的な言い方でつぎのように宣言なさった。すなわち「生命を得る者はこれを失い、わがために生命を失う者はこれを得べし」(マタイ伝十〇三十九)と。

この真理が霊の成長に当って真実であることは毎日のけいけんによって証明されるであろう。すなわち、もしもあなたがいま研究していることにおいて「わが身をささげる」、言葉をかえて言うと「自我をなくする」ならば、あなたは真理を得る、すなわち「自分を見出す」にちがいない。

もしも一人の音楽家がピアノに面してベートーヴェンの傑作を演奏するとき、彼がまったく「無我の境地」で一心不乱の演奏をするならば、その演奏は聴衆のこころの奥底にまでひびくにちがいない。然るに彼が「無我の境地」に入ることができずに、自分の立場に気をとられて、聴衆を喜ばすかどうかをかんがえているならばそれは「自我を主張する」ことだけにおわるにちがいない。

「人間にとって最高の義しいいさおしは、隣人の利益と神の光栄のためにのみ語りかつ行うことである。かくして生命は神聖な財産となるのである」。

キリストは実在である。キリストは真実生きてまします。「われ知るわれをあがなう者は生く。後の日に彼かならず地の上に立たん。わがこの皮この身のくちはてん後われ肉にありて神を見ん」(欽定訳聖書ヨブ記十九〇二十五―二十六参照)。

これこそ、キリストが復活したもうたのちに、十一使徒と少くとも七十人の弟子とを支えたにちがいない信仰である。これらの者のこころの中にはキリストが復活体をもっていまも生きたもうかどうかという疑いは一点もなかった。これらの者は復活のキリストを目のあたりに見た証人であった。彼らはその目で見、その耳で聞き、その手で「復活の救い主」が体をもってその場に居りたもうたことを感じとったのであるから、主の生きたもうことを身をもって知ったのであった。

次の光栄ある示現が予言者ジョセフ・スミスとシドニー・リグドンにあらわれたのも、「主は生きたもう」という不動の信仰があったからである。

「さてこの子羊につきて為されたるさまざまの証のあげく、われらの為す最後の証はすなわち『主は実に生きたもう』ことこれなり。われらは彼がすなわち神の右に座したもうを見たり。また御父の

生みたもう独子なりと証したもう声を聞けり。すなわち諸々の世界は彼の手により、彼の手を経て、また彼によりて先に作られ、また現に作られ、これに住む者たちも皆神より生れたる息子と娘なることを証したもう」（教義と聖約七十六〇二十二―二十四）。

キリストは真実肉体を受けてこの世にお住みになった。キリストは神によって生れたもうた「ベツレムの嬰児」、この世にただ一人の「完全な紳士」、最高の人格を有する「理想の人」、人類の長兄、人類の「救い主」、「油注がれし聖者」である。

神よ、われらの生活においてキリストを実在ならしめたまえ。心の中に「キリスト実在なり」という確信をもつ者は、このふくざつな宇宙の中にある安全な道しるべとしてキリストを「道であり、真理であり、生命である」お方として受け入れる。イエス・キリストの福音の諸原則にしたがうならば平安と幸福を得るにちがいない。キリストはこの戦いに疲れた世界にこの平安と幸福とを与えると仰せになっている。「キリストが生きてまします」という事実と、今日その教えを実行して幸福と人類の進歩発展とを得ることができるということをいまこそ充分に語るようにと、われわれはいつも祈るべきである。

伝道部長メッセージ

あなたがたの中に病んでいる者があるか。その人は教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリヴ油を注いで祈ってもらうがよい。

ヤコブ書　第五章十四節

子供たちがとつぜん悲鳴をあげたので、私は玄関からとび出して自動車をとめておいたところへ走って行きました。見ると旅行用の大型車はもとのところにおらず、坂道をひとりで走りおりて道のまん中にとまっていました。その前部のとびらは両方ともあけはなしになっており、なおよく見ると、当時二才半になったばかりの一番下の「ダーギー」坊やが車道のはしっこにねじれたような塊になって倒れていました。いそいで抱きあげると、もう蟲の息で顔の色は青ざめ、頭のよこと腕に何箇所もうちきずや切りきずがありました。

両手にかかえてかすかなうめきを耳にしたとき、私はその小さな肩から胃ぶくろのあたりにかけてタイヤのあとがついているのがはっきり目にうつりました。私は大いそぎで玄関へとってかえすと、妻の両うでの中へ坊やをまるでおしこむようにしてわたしました。私は「車にひかれたんだ。祝福をする間じっと抱いておいで」と興奮した声で言うと同時に、聖別しておいたオリヴ油の瓶の口をあけはじめました（私はちょうど前の晩に潅油の儀式を行いにゆきましたので、オリヴ油の瓶は車のとびらにとりつけてある物入れの中へ入れておいたままでした）。

もうその前に、上の三人の子供たちは坊やをとりかこんで泣きながら大声で「お父さま、ダーギーが死んじゃ、いや。死んじゃいけない」と叫んでいました。私はすぐさま坊やの頭に油をそそぐと、

伝道部長
ダワエン・N・アンダーセン

次にイエス・キリストの御名と私のもっている神権により「この子がこの世に生れてきた使命を全うすることのできるよう、この子の命を助けたまえ」と祈りながら潅油の「結び固め」をいたしました

当時十才になったばかりの長女のトルーディはこのときすっかり泣きやんで、母親に「でもね、お母さま。神さまは今の儀式でダーギーをなおして下さるの。二人の人でしなかったわね」と聞いていました。それにこたえて母親は「神さまはきっとなおして下さるのよ。神さまは、ひじょうの場合に一人の長老が二つの儀式をしてもよいとおっしゃっているの。お父さまは神権をもっていて、神権をたいせつにしていらっしゃるから、神さまはきっと聞いて下さるのよ」と言っていました。

これをみて、私のとなりにすんでいる人がすぐさま玄関のところへ来てくれました。この人は、私の車が道にほっておかれたので何か起らなければよいがと思っていたのでした。そして親切にも、三十分もかかる病院まで車でつれて行きましょうと言ってくれました。私たちは、できるだけ動かさないように、坊やを幾重にもシーツで包み、私の両手にそっとかかえて病院へかけつけました。その途中、私は坊やのかぼそいうめき声を耳にすると胸がせまる思いでしたが、それでも私はこころのうちに、主は私たちの切なねがいをお聞きになった、妻と子供たちの信仰によって、主は私たちの祈りにこたえて私たちの一番よいようにして下さるにちがいないという安けさをおぼえていました。

病院へ着いてみると、医者や看護婦たちが救急手術室へ坊やを大いそぎで運んでゆくので、容態のただならぬことがはっきりとわかりました。妻はほかの子供たちをおちつかせて適宜に世話をしてから、私と一しょに手術の結果を待つことになりました。妻が涙を流しながら私のそばに腰をかけているとき、私は妻にむかって、主はかならず坊やについていて下さる、しかしもしみこころによって私たちからおとりになっても、それはそれでよいのだとはっきり申しました。

ずいぶん待ってから、坊やは病院の台車にのせられて手術室から出てきました。そのとき妻は酸素吸入やら輸血やらをされている坊やの青ざめてぐったりとしたからだを見るとまたわっと泣き出しました。するとそばにいたかかりのお医者が妻の顔をおどろいたようにながめて「まあ、おくさん。ちっとも心配なさらなくてもいいですよ。手術の経過はとてもよいのです。もうだいじょうぶですよ」と言いました。その瞬間私たちは胸の中で、何ごとも知りたもう愛の神へ心からの祈りをささげたのでありました。

ところがまだこのさきがあるのです。そのあくる日、家族一同の興奮がおさまってしまったとき、となりのおくさんが私の妻のようすを見にきて次のような話を妻にしました。

「友だちがちょうど今私のところへ来ましたの。それがあの病院の外科の婦長なんで、きのうお宅のだんなさまが坊ちゃんをつれておいでになったそのときに当直だったんです。そして言いましたわ、あんな今にも死にかかっている自分の子供をつれてきて、しかもおちついて少しもどうてんしていない父親なんて、ここの病院が始まっていらい見たことがないって。それで、みんなが強い印象をうけたので、彼女はもしかしたらその人が、私がおとなりに住んでいらっしゃると言ったのを聞いたおぼえがあるモルモン教会の監督のアンダーセンさんではないか知らと思って、私のところへ聞きに

よったんですよ。私がそうなんですよと言うと、話をつけずて、みんなして坊ちゃんの運ばれてきたときの様子をながめたとき、これはたぶんだめだろうと思ったので、あのかわいい坊ちゃんとおちついていらっしゃるお父さまとを見くらべて胸をしめつけられる思いがしましたと言いました。しかし、何としてもその命をとりとめなければならないことがわかっているので緊急の手術を行いました。彼女が言いますのに、私たちが坊ちゃんを手術台にねかせたときは、とても心配でいたいたしい思いでいっぱいでしたが、手術が行われて行くにしたがって、何とも言えない一種の霊気が手術室に満ちていることを感じました。それで手術台ごしにお互いが目と目をじっと見合ったときすぐに、互いに一言もいわずにこの子は助かると確信したのですって。おくさまはこの話をお聞きになりたいでしょうと思いましたので、ちょっと」。

ダーギーが病院にいたうちに、ほかのお医者が大ぜい見にきてこの「近代の奇蹟」におどろいていました。ほんとにそれは近代世界におこった奇蹟です。それは神権が神によってこの地上に回復されていたから起ったのであります。たぶんあの病院の幹部の人たちには解らなかったでしょうが、私たちは何によってその祝福が授けられたかが解っています。私は今ひじょうにけんそんなこころでこの出来事をみなさまに申し上げることができます。私の生涯のうちにはいろいろの経験がありましたが、これは中でもすぐれた経験の一つであるからであります。

私は今、自分も神権の権能によって医された経験をもっている私の友人のあかしがよくわかります。私は次に彼の父のことばによってその話をしたいと思います。

「千九百十六年の春、わしらが乾農法をやって耕作をしていたとき、うちの三人の子供らがトラクターの引く八本すきの耕うん機の台のところにのっていた。すると突然、二人の子供がトラクターのそばに来てきちがいのように泣きさけぶので、ひょいとうしろを見ると三番目のが土だらけになって地面でもがいているのがわかった。よく見るとひどいけがをしていることがわかったので、すぐさまエンジンをとめてそばへとんでいって見ると大へんなけがで今にも死にかかっていた。かっさらうように抱きあげて、そのときはもう何をしておったがよくわからないが、かかえたまま一キロ半近くもある自分の家へ走って行きはじめた。頭をみるとむざんにくだけて血がだらだら流れていた。トラクターのそばを通るとき、命が助かるように祈れという考えがわしの頭に浮んだ。そこで片ひざを地につき、もう片っ方のひざにその子をのせ、これはほんとに自分の考えでなく全く霊感によることであるが、その子のいびつになってしまった頭を両手にはさんでもとの形になおした。そして、イエス・キリストの御名により、この子の命を助けたまえと祈った。祈り終るや、わしの胸の中から心配がすっと消えてしまい、この子はかならず助かるという確信がわいた。

家へ着くと、妻にむかってこの子は大丈夫だと言ってきかせ、モーセス・P・ジョルゲンセンを迎えて二人で潅油の儀式を行った。それからプレストン・メリル医師に見てもらったが、医師のことばによると、左の耳のうしろから右の目の上にかけて頭の骨が完全にわれていた。そしてまず百人に一人助かるか助からないかの重傷だと言った。トラクターにひかれたことは下着に輪のあとがついていてわかったがそのトラクターの重さは四百五十キロ以上あった」。

今この子は博士の学位をとってアメリカ一流の科学者になっています。そして、教会の集りでまた友だちの間で、私の生命が助かったのはまことに神権の権能によるのでありますと何度もあかしをいたしました。彼の名はメルヴィン・クックと言います。

しかし、病や負傷をいやすだけがメルケゼデク神権にある賜ではありません。メルケゼデク神権には多くの賜があります。神権の権能と能力には際限がありません。忠実な神権者は、家族の誰にも祝福を与える権能があり「家長の祝福」をすることができます。彼は家庭のために予言をする権能をもち、また家族のために啓示を受けることができます。また妻や子供たちが病気のときに潅油の儀式を行い、悲しんでいるときになぐさめや指示を与えることができます。しかし、ある人がその家族の中にもっている神権の力は、神権の活動力から見るとその一部にすぎません。神権をもっている人は、隣人のために奉仕する多くの機会を神権によって与えられるからであります。神権者は教会のプログラムを遂行する場合に、管理をする権能と指導をする権能と神から啓示を与えられる権能とを神権によって与えられます。神権こそまことに神の御名によって行う権威と権能であります。

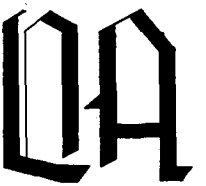
主はあなたの力を必要としていらっしゃいます。主はその力を今必要としていらっしゃいます。あなたもまた主の助力を必要とし、その助力が今必要であります。若い男の方々よ。あなたはそれについて今何かをしていらっしゃいますか。あなたは神権が受けられるように努力していらっしゃいますか。もしあなたが神権者であるなら、あなたは神権があなたのためにも、あなたが共に働らき共に生活している人々にも祝福となるように神権を用いていますか。神権は、ほかの人々のめぐみにもなりまた役にも立つようにあなたに授けられた神の権能であります。神権を忠実に役立たせる人々の生活には、ほんとうに多くの喜びと感激とが神権のためにめぐまれているではありませんか。神権こそ地上における人間が得ることのできる最も貴い財産であります。神権こそ、もしも神が地上にいますなら、為そうと思いたもういろいろなことを為したもう権能であります。

神権のもつ偉大な権能は魔術師シモンがよく認めていました。彼はキリストの使徒たちがもっていた神権の権能が欲しくてたまりませんでした。それでお金をさし出して「わたしが手をおけばだれにでも聖霊が授けられるように、その力を私にも下さい」と言いました。しかしペテロはシモンに言いました「おまえの金はおまえもろともうせてしまえ。神の賜物が金で得られるなどと思っているのか。おまえの心が神の前に正しくないから、お前はとうていこの事にあずかることができない」と（使徒行伝八〇十八—二十四参照）。

このような力強い神権の権能は、神の誡命を忠実に守っている人にだけあらわれます。神権の権能は、神権の権能をますます強くするように努力し、忠実に誡命を守って神権のつとめを行う人たちにだけあらわれます。

私は、神権というこの大きな賜を受けるにふさわしい生活をしなくてはならないということが、私たちの教会の男の会員一人のこらずにわかりますようにお祈りいたします。

質疑応答



解答者　ジョセフ・フィールディング・スミス長老

「ニーファイ第一書第三章七節の聖句と、教義と聖約第八十四章四節の聖句とはどうして調和させることができるか」

質問。

「主が命じたもうことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法がそなえてあり、それでなくては、主は何の命令も人に下したまわない」（ニーファイ第一書三〇七）という聖句と、教義と聖約の第八十四章四節にある聖句とはどのようにして調和させることができますか。教義と聖約で聖徒たちは、今の代にインデペンデンスに神殿を建てよと命ぜられましたが、その神殿は神の命令通りに建てられませんでした。

解答。

ある人にとって何かこのようなむじゅんがあるように見えていても、この二つの聖句は少しもむじゅんしていない。今の代の「代」とは「ある段階から次の段階へとつづく、すなわち父から子へとつづいてゆく時期」とふつうに考えられているが、「救い主」がユダヤ人に「よこしまにして不義なる代はしるしを求む。されど……しるしは与えられじ」（マタイ伝十二〇三十九）と仰せになったとき「救い主」ははっきりとした時の制限をおつけにならずに、よこしまがつづくかぎり無期限に存在するある状態をさしておいでになった。たとえその状態が父から子へ子から孫へと幾代にもわたってつづいても「不義なる代」であったのである。

主なる神はさきの啓示を予言者ジョセフ・スミスにお与えになったとき、その時から百年以内にまだ生きている人々のことを考えておいでになった、またこれらの人々が神殿を建てて「栄光の雲がその宮居の上にかかる」ことを考えておいでになった（つまり今の代とは百年間である）と仮定することは無理でないかも知れない。また千八百三十二年に生きていた人は一人も現在この世に居ないと信

ずることも合理的である（百年たっても神殿は建たなかった）。

それにもかかわらず、主なる神がニーファイに与えたもうた誡命の中にも、またニーファイの子孫の霊のためにも物質上のことのためにもなくてはならない真鍮版を手に入れる際、ニーファイに必らず助けを与えるという御言葉の中にも、主なる神が予言者ジョセフ・スミスに下したもうた誡命もしくは約束とむじゅんしているところは少しもない。

千八百四十一年一月に教会員へ下った別の啓示の中で、主なる神は次のような御言葉により神殿を建てる責任から教会員を免除なさった。

「誠にまことにわれ汝らに告ぐ。われいかなる人の子らにもせよ。命を下してわが名のためにある業をなさしむるに、これらの人の子たち力を尽し、その持てるものをことごとく出してその業を為し努めて止まざるに、然も彼らの敵襲い来りてその為す業をさまたぐるとき、見よ、われもはやそれら人の子たちにその業を為すを求めずして彼らのささぐるものを喜びて納るるはうべなり。

「而して悔改むることなくわれを憎むかぎり、わが聖き律法と誡命とを破る罪と咎とを、わが業をさまたぐる者共とその三代四代の末までも彼らの頭上にむくいん、と主なる神言う。

「さればこれを以てミズーリ州ジャクソン郡にわが名のために一つの市と一つの宮居とを建てんことを命ぜられて敵のためにさまたげられし者たちの捧物をわれ受け入れたり、と主なる汝らの神言う。

「敵もし悔い改むることなくわれを憎むかぎり、三代四代の末までもさばきと憤りと怒りとなげきと苦悩と切歯することを以て彼らの頭上にこたえん。と汝らの主なる神言う。

「これを以て、われよりある業を為せと命ぜられたるに、その敵の行動と圧迫とにより、事をさまたげられたるすべての者に対する汝らの慰めとして与うる範例となす、と主なる汝らの神言う。

「われはすなわち主なる汝らの神にして、清き心を持ちたるがミズーリの地にて殺されたる汝らの兄弟をみな救わんとす、と主は言う」（教義と聖約百二十四〇四十九―五十四）。

以上をもって質問に対する充分な解答となるはずである。主なる神は教会員から直接その努力を受け入れたもうたが、またその責任を解除なさったから南北戦争中にミズーリの区域が戦争に苦しみ神の怒りが下って、主のみわざをさまたげた者たちがあの予言通りに神の怒りを蒙ったことはわれわれの関心を呼ぶことである。

また、リーハイが指摘しているように真鍮版を手に入れることは絶対に必要であるから、主がニーファイのために道を開きたもうたことを忘れてはならない。ニーファイが手に入れるためにエルサレムまで戻されたこの神聖な版をもつかもたないかは、霊の生命を得るか霊の死を受けるかの重大な境目であった。それであるから、主なる神はあらゆる反対をくつがえして、ニーファイが与えられた任務を遂行できるようになしたもうた。批評する人々の中には、しからば何故予言者ジョセフ・スミスの時代に、主なる神があらゆる反対をくつがえして、啓示の書にしるしてある通り主の家を建てることができるようになさらなかったのかと言う者がある。

それに対しては、その神殿を建てるべき時節がまだ本当に来ていなかったから、主はその日を延ばしたもうたのだと言えば充分である。千八百三十二年の当時には、いかなる事態を排除しても神殿を

建てる必要はなかった。その当時ひじょうに壮大な神殿を建てなければならなかったなら、主なる神はいかなる反対をおさえつけても神殿を建てさせなさったであろう。ところが、これに反して神は聖徒らの責任を解き、神殿の建つ日をのばしたもうた。教会員の努力に関する主の御言葉を考えてみるとき、当時の会員が努力をつくさなかったとか、主なる神が悪人たちをおさえつけなさったが神の命令が及ばなかったなどと見るのはまちがいである。

モルモン経が出版されるまでにはこれと同じように明らか失敗があった。マーテン・ハリスがモルモン経の原稿をぜひほかの者にも見せてほしいとねがったので、予言者がそれを許したところ、原稿は何者かに盗まれてしまった。その目的は原稿に手を入れて内容を変えてしまうことであって、神はそのことを予言者に指摘したもうた。

予言者とマーテン・ハリスは取りかえしのつかない誤まちをしてしまったので、始めのうち神が何してこのような重大事を起させなさったのかといぶかっていた。ところが、本当のところ主なる神は最初から何が起るかごぞんじであって、このような重大なまちがいに対してはすでに用意をなさっていた。

この原稿の紛失は、予言者がひじょうに必要としていたよい教訓であった。その結果として、主なる神は歴史上の出来事がさらにくわしく書いてある別の版（ニーファイの小版）を用意しておいて下さったことが明らかになった。それであるから、この失敗はモルモン経を読む者の全体にとって神のめぐみとなったのである。

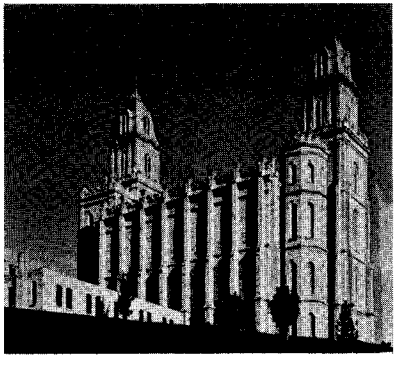
本当に神は始めから終りまで見通しであるから、人間のすることが何であっても、主の目的は必らず成就するにちがいない。

神殿を訪ねて（11）

マンタイ神殿

一八八八年五月二十一日建堂

一八七六年の十月になると、ソルトレーク神殿とセント、ジョージ神殿の建築が進められ、同時にローガン神殿の設計がはかどっていた。そのころにこのマンタイ神殿の建築の許可がおりたのである。



信仰講話

第二講

これは千八百三十四年から同三十五年の冬季間、オハイオ州カートランドで行われた「長老のクラス」で述べられた講話である。

一、第一講において「信仰とは何ぞや」ということを学んだので、この第二講では進んで「信仰の目的(対象)」について学ぶことにしよう。

二、われわれはいま、神が独立せる唯一最高の支配者であって完全円満の徳をそなえ、全知全能いたるところに在し、齢のはじめなく生命のおわりなく、内にあらゆる善き贈り物と善き道とをたくわえ、光の父にして、その内に信仰の原理を独立にそなえ、かつあらゆる他の理性あり責任ある者の信仰が生命と救いとを得るために集中する対象であることを認めている。

三、本題中のこの部分を明瞭に示すためには、人類がすでにもっている幾多の証拠と、これらの証拠がもとずく創世以来の基礎事実をさかのぼって示し、神の存在を信じさせなくてはならない。

四、われわれは創造のはたらきによって現実にあらわれている証拠、すなわち毎日肉眼でながめている証拠のことを言っているのではない。われわれは、イエス・キリストの啓示にしたがい、千姿万態かぎりなき創造のわざに神の永遠の力と神性とがあらわれていることに気づいている。ロマ書第一章二十節に「それ神の見るべからざる永遠の能力と神性とは造られたる物により世のはじめより悟りえて明らかに見るべければ」とあるが、われわれは万物を創りたもうた神があるという考えを人の心にはじめて思いつかせる証拠のことを言っているのである。

五、そこで、われわれはいま進んで、はじめて創造された時における人類の立場をしらべて見ることにする。歴史記録者であったモーセは、創世記第一章二十—三十節にその記事を次のように誌している。これをあたらしい飜訳によって示すと次の如くである。(註。「高価なる真殊」モーセの書第二章二十六—二十九節、第三章十五—十七、十九、廿参照)

六、「われ神、太初よりわれと共にありたるわが生みし独子に言いけるは、われらに象りてわれらの像の如くにわれら人を造らんと。而してその如く成りぬ」。

七、「われ神言いけるは、彼らに海の魚と空の鳥と家畜と全地と、地に這うあらゆるものとを治めしめんと」。

八、「われ神、わが像の如くに人を造れり。わが生みし独子の像の如くにこれを造り、すなわちこれを男と女とに造りたり。われ神彼らを祝福して彼らに言いけるは、豊に生めよ、殖えよ、地に充ちよ、地を従わせよ、また海の魚と空の鳥と地の上に動くすべて

の生物を治めよと」。

九、「われ神、人に言いけるは、見よわれ、全地の面にありて種子をもつすべての草と、種子をもつ果実の成るすべての樹とを汝に与えぬ。これらは汝の食物となるべし」。

十、「われ主なる神、かの人をとり彼をエデンの園に置きてこの園の手入れをなさしめ、またこれを守らしめたり。われ主なる神、その人に命じて言いけるは、この園のすべての樹よりは汝の意のままに食うことを許さる。されど善悪を知るの樹よりは汝食うべからず。然はあれども、食うと食わざるとは汝に任す。そは汝に与えられたればなり。されどわが汝に禁じたるを忘るな。汝これを食う日には必ず死ぬべければなり」。

十一、「われ主なる神、土よりして野のすべての獣と空のすべての鳥とを造り、テダムがこれを何と呼ぶかを見んとて、これらにアダムのところに来よと命じたり。……而してアダムがすべての生物を呼ぶところを以て、皆その名とすべしと命じたり。アダムはすべての家畜と空の鳥と野のすべての獣に名をつけたり」。

十二、以上の聖句から、われわれは人がはじめてつくられた時におけるその立場と、神からさずけられた知識と、人の占めていた高い地位、すなわち地上にあるすべてのものの主でありこれらを支配する者である地位とを知り、またそのとき人が、神と人との間をへだてる「幕」なしに、その創り主である神と自由に交通をしていたことを知るのである。

十三、「高価なる真珠」モーセの書第四章十四節以下にはさらに次のように誌してある。

「彼ら（アダムとイヴ）日の涼しきころ園の中に歩み居りし時、主なる神の声を聞きしかば、アダムとその妻ただちに主なる神の面を避け、園の樹の間に行きてかくれたり。われ主なる神、アダムを呼びてこれに言いけるは、汝は何所に行くや。彼言いけるはわれ園の中にて汝の声を聞き、わが裸なるを見しによりて怖れてかくれたりと」。

十四、「われ主なる神、アダムに言いけるは、誰が汝の裸なるを告げしや。わが汝に、食うなかれ、もし食えば汝正に死ぬるべし、と命じたるその樹より食いたりしやと。その男言いけるは、汝がわれに与えてわれと共に居るべしと命じたまいし女、その女われにその樹の実を与えたればわれ食えりと」。

十五、「われ主なる神、その女に言いけるは、汝が為したるこれは何事ぞや。女言いけるは、かの蛇われをだましたれば、われついに食えりと」。

十六、「われ主なる神、女に言いけるは、われ汝に妊みの苦しみを大いに増すべし。汝は苦しみて子を生まん。されど汝は夫を欲し彼は汝を支配すべし」。

十七、「またわれ主なる神アダムに言いけるは、汝はその妻の言に聞き従い、わが汝に命じて、食うべからず、地は汝のためにのろわる、と言いたる樹の実を食いたるによりて、汝は生涯苦しみて地より食を得ん。地はいばらとあざみとを汝のために生じ、汝は野の草を食うべし。汝は顔の汗によりて食物を食い、而してついに土に帰る。汝は正に死ぬべければなり。そは、土の中より汝は取られたればなり。汝は塵なりき、さればついに塵に帰るべしと」。

このあとで、さきにわれわれの言ったことが、すぐ実際に起っ

た。すなわち人はエデンから追放された、もしくは送り出されたのである。

十八、以上挙げた引用句の中から二つの大切なことが明らかである。第一に、人は創造されたのちに英知もしくは理解の能力なしに放置されていたのではない。また誰によって自分がつくられたか、誰の命にしたがわねばならぬかという現実に関して（これこそ自分を幸福にする大事な点である）暗黒の中をさまよい無知と疑いのまま存在していたのではない。神の前に立つことを許され神の口から教えを受けることを許されていた。

人は神の声を聞き、神の前を歩き神の光栄を見つめた、その間に人の知力を霊が照らして神のつくりたもうたあらゆるものに名前をつけることができたのである。

十九、第二に、人は神の命にそむいたとは言え、そのことは創造主があることと、創造主の栄光を知ることとに関して人にさずけられた知識まで失わせることはなかった。人が神の御声を聞くやいなや、神の前から身をかくそうとした事実がこれを証明している。

二十、そこでわれわれはこれまでに、神が人に「生命の息を吹き入れる」とすぐに話をしはじめたもうたことを示し、また人が「堕落」をしてからも声をかけることをおやめにならなかったことを示したから、われわれはさらに進んで、人はエデンの園から追い出されはしたが、神が在るという知識を失いもしなかったし、また神御自身も人にみこころをあらわすことをやめたまわなかったことを示そう。

余　録

天使（Angels）とは何か。

神の御ことばを伝えるために（ルカ伝一〇十一―三十八参照）、人間に導きとめぐみを施こすために（使徒行伝十〇一―八、三十―三十二参照）、救いの教えを知らせるために（モーサヤ書第三章参照）、神権と神権の鍵をさずけるために（教義と聖約十三章、百二十八〇二十―二十一参照）、悔改めを要求するために（モロナイ書七〇三十一参照）、危難から聖徒を救うために（ニーファイ第一書三〇二十九―三十一、ダニエル書六〇二十二参照）、神のみわざを完成するように導びくために（創世記二十四〇七参照）、末日に於て聖徒を集めるために（マタイ伝二十四〇三十一参照）、神の御わざに関係しているすべてのことを成すために（モロナイ書七〇二十九―三十三参照）、日の栄の国にまします神のもとから、または神によって遣わされる者が天使、すなわち神の使である。天使（神の使）には次のような種類がある。㈠先在の状態に於ける霊（黙示録十二〇七、モーセの書五〇六―八参照）、㈡生きながら天に昇った者（モーセの書七〇十八―六十九、ニーファイ第三書二十八―三十参照）、㈢全うされた義人の霊（教義と聖約七十六〇六十六―六十九、（プル書十二〇二十二―二十四参照）、㈣復活した人々（マタイ伝二十七〇五十二―五十三、ヒラマン書十四〇二十五、教義と聖約二十七〇十二―十三、百二十八〇二十―二十一、第十三章、百十〇十一―十六、百三十三〇五十四五十五、百三十三〇五十五参照）㈤義しい人々（創世記第十五章、黙示録二〇一、二〇八、十二、十八、三〇一、七、十四参照）。

しかしながら、創世記四十八〇十六にある「み使」、マラキ書三〇一にある「契約の使者」が「主なるキリスト」であるとおなじように、出エジプト記三〇二にある、しばの中の炎のうちに現われた「主の使」は「主イエス・キリスト」自身である、ジョセフ・スミス改訳聖書にはここのところが「The presence of the Lord appeared to him」となっている。

或る聖研より

（聖書研究会）

蟬の声にも秋風にも、もの寂しさのある九月の第四日曜日、何十日とつづいた天気に容しゃなくほこりのはいってくる中央支部の一室に先月とおなじ顔ぶれが聖書を開いてルカ伝七章の研究をはじめました。

司会　ルカ伝の第七章には話が大きくわけて四つあるとおもいます。

㈠　百卒長の話

㈡　息子のよみがえり

㈢　バプテスマのヨハネ

㈣　マグダラのマリヤ

まず、ルカ伝を書いたルカという人についてせつめいしていただきましょうか？

KA　お医者さんだったルカはギリシャ人で異邦人でした。

司会　そうですね。マタイやヨハネがキリストの弟子であり。ちゃんとした人だったのにくらべて違ったみかたをしているのに注意してみたいと思います。

（編集子註。古くからの伝承によるとルカはシリヤのアンチオケの人であったということです。ルカは異邦人を父としたギリシヤ語国民の一人であって豊かな教養とすぐれた文才のあった人だということができます）

司会　百卒長とは何ですか？

OK　軍隊で百人の部下をもった隊長でしょう、千卒長というのもありますから。

司会　八節に権威の下に置かれているという所はどういう意味をもっているのでしょうか？

OA　やはり軍隊という意味でしょう。

宣教師　自分自身で行かずに命令しただけでいいと言いました。直接にキリストが来る必要がないと言いました。

司会　ここでイエスはこんなにつよい信仰はみたことがないと言っていますが、どうしてこういう信仰をもっていたのでしょうか？

Y　千卒長の権威に服していることによってこういう行き方を知っているのではないで

すか？

OC 権威の下に服していることは、神に服しているという時にすなおになるのかな？

司会 ここで百卒長とイエスとは信仰で結ばれてはいるがイエスと兵とは別に信仰のつながりがあったと書いてないですけれど、兵が医されたというのはどうしてなのかな？

SI これは百卒長のすなおな信仰がこの兵を救ったと解釈すべきではないかな。

（編集子註。この百卒長はその僕べを頼みにしていたとありますから主従の仲は互いに信じ信られる仲であったと思えます。従って百卒長の強い信仰と愛の力がイエスの霊力を僕べに伝えるのに役立ちました。不信仰が疑惑、反抗の精神をもっていると神癒の力を消すことがあります）

司会 イエスは今までカペナウムの自分の家で伝道しておられたが、ナインに伝道された時は伝道団として行かれたようでこの時に多くの奇蹟を行ったようですが、ここでこの息子の母親は別に信仰をもっていたとは書いてないですね。

YK このカペナウムを他の本でみるとカペルナウムという説があります。

TA ここの奇跡はどう考えたらいいかな。

MM ここはキリストの愛が中心ではないかな？

宣教師 この時までキリストは死人をよみがえらせるのは始めてですから、これを人にみせてイエスの力を表わすためです。

K しかしここに信仰がないともあるとも書いてないのはどういうわけでしょうか。

OD ここはもう信仰をもっているのではないかな？

司会 ここは人間的なキリストが悲しみを同情して母親のために奇蹟を行って、信ずるもののみでなくて神の愛はすべての人に与えられるという意味です。

（編集子註。死んだ子を生き返らせたいという親のねがいは血のにじむほど切実なものです。こうした切実なねがいにキリストの深い愛が加わって奇蹟があらわれました。キリストがその母親を見て「泣くな」と仰しゃったとき、この人こそ神の人という信仰が母親に生じたとも思えます）

司会 次のバプテスマのヨハネのところでヨハネはなぜ疑問を起したんでしょうか？

KB ヨハネはキリストを確かめたかったのではないでしょうか？

SJ ヨハネははイエスの現実的な行ないが予言のような天の軍勢と共に王として君臨されるのでなかったから、実際的な期持を裏切られて、このような小さな町で小さなことをしているイエスに意外に思って言っているのではないだろうか？

宣教師 ヨハネはこの時ヘロデ王に捕えられて弱くなっていましたし、イエスが力をもってそれを解放して呉れることを頼んでいるのではないか？

司会 ヨハネはイエスと親戚関係になっているのでここの悩みのところは良くわからないですね？

（編集子註。ここのところにはふつう三つの解釈が行われています。一は、弟子をつかわしたのは弟子たち自身に確信を与えるため、二は神の国を速かに実現させるため、三はヨハネ自ら迷っていたためです。二十二―二十三節の聖句から三の解釈が正しいとしている人もあります。タルマッジ長老はさらに、ヨハネが弟子をつかわしたのはキリストに自分のことを思い出してもらうためであったかも知れないと言っておられます（「基督イエス」二五五頁参照））

司会 次にヨハネのことをキリスト何か冷た

い言葉で言っていますが、その後でヨハネの事をほめています。ここで風にゆらぐ葦というのは何をいみしてますか？

KJ 風にゆらぐ葦だから弱いという意味。

OY 実際に川岸でバプテスマしていたのだから葦は河原に生えているでしょう？

司会 ここの群衆というのは誰でしょうか？

OY 群衆はヨハネのバプテスマをうけた人たちでしょう、うけたのはずっと前だから。

司会 この群衆がキリストについて来たわけですね、28節の矛盾する所はどう解釈しますか？

ST 神の国というのは教会でしょう？

KI ここでは本当に強い信仰は始めはもっていないけれどもこの後に神の国に入ることのできた人はこれよりは大きいということでしょう。ヨハネはまだ神の国に入っていないでしょう。

KS この神の国というのは来世のことでしょう？

AB 人間は神の国の人よりも弱いという意味ですね。

司会 人間のヨハネは神の国に入ったものより小さいが、彼も将来神の国には入れるでしょうね。

KT それでなければ可哀そうだわ。……

宣教師 ヨハネは立派な仕事をしたけれどもまだキリストの使命を解っていませんのでキリストを信じた群衆はヨハネよりもキリストの使命をよく知っていたという意味ではないですか。

YY 神の国の一番小さいものはキリストではないかな？ そうするとちょっとおかしくなるかな？

司会 それじゃやはりおかしいでしょう？

AC そういう解釈はちょっと変だな。

YY そうだね、引込めます。

（編集子註。「女の産みたる者のうち、ヨハネより大なる者はなし」という聖句の意味。一、ヨハネは主の前に道を備える神聖な使命を委ねられた。二、主イエス・キリストにバプテスマを施こす栄誉を与えられた。三、神の王国のことを執り行う権能の鍵を委ねられていた唯一人の正しい神権者であった。この点から見て、ヨハネより偉大な人間はそれまでになかった。「されど神の国にて小さき者も、彼よりは大なり」という聖句の意味。「されど神の国（教会）すなわち汝らの間でわれ自身（キリスト）は微小であると考えられているが、ヨハネより大なる者である」（「予言者の教え」二七五―二七六頁参照）

司会 ここに子供の遊びの例が引きだされてますね、これはどういうことですかね？

OS これは自分がエホバであったことを世の中の人がみとめてくれなかったことを言っているんでしょう？

司会 ここは次の節と続きますね。

OS だからユダヤ人が本当の意味ですなおについて来てくれなかったことをたとえているんでしょう。

司会 笛は次の節のよろこびの歌を表わしヨハネは神の国の恐ろしさについて言ったがどちらをみても喜んでも泣いてもくれなかった。すなわち笛をふいたのは、イエスとヨハネであってそれについていく方が踊るのと泣くのが群衆という意味でしょう。

宣教師 ヨハネは皆に厳しくしたし、イエスは皆と共に喜ぼうとなさったが両方共否定したということですね。

（編集子註。子供たちが「互いに呼びかけ」は、マタイ伝十一〇十六にある「ほかの子供たちに呼びかけ」という意味であると解すべきです。われらは「イエスとヨハネ」

汝らは「世の中の人々」、喜びの言葉を聞かせても悲しみの言葉を聞かせても世の中の人々は全く無関心であったという意味が言ってあると解されます）

O　ここで人々は受け入れなかったが、それによって救いを全うすることになったが、その時受け入れていたらいったいどうなったか考えるとこれは面白い問題だよ。

司会　もう時間が少なくなったので次にいきましょう。

KS　ここでは結論がでてますね、五十デナリをゆるす方より五百デナリをゆるす方が余計ゆるされているということですね。

KL　信仰の量によって許される程度が違うということですね。

S　ここはやはり信仰深い人はキリストを余計愛していることになりますね。

A　この次は予言者をためそうと思って、キリストを招いたんでしょうかね、キリストを招いておいてやっつけようと思っているんだろうね。

司会　しかしここはルカは皮肉的に書いたのではなくて、シモンはやはり招待しているのではないかな？　しかし下座につける所をみるとやはり本当に心からは招待していないね。

UA　ここでは女の信仰とパリサイ人は絶体にキリストを救い主だとは思ってなくても少しは尊敬している。その対比を書いているわけですね。特にマリヤとの対比ですね。

SY　ここでマグダラのマリヤといっているのは違っていませんか？　ベタニヤのマリヤはマグダラのマリヤとは同じだとは云っていないのではないですか？

司会　でもこれは定説として同じだと書いてありますが？……

（編集子註。ヨハネ伝八〇三以下の聖句にある「罪ある女」がマグダラのマリヤであるという伝説があるが、これを確証する根拠はまだありません。従って三十七節の「罪の女」とマグダラのマリヤと結びつけることは必然でない。またベタニヤのマリヤが「罪の女」であるとは言ってない）

司会　いずれにしても、ここの所でマリヤが主の足下にひざまずいて足をふいたという所は、ルカの画いた美くしい絵ですね。

ルカはこういう心のほのぼのとするような情景をキリストの愛の美くしさ、またそれに心から接する人々の美くしさをこのような絵に画いて残しているのです。

会員のみなさまへ

「あなたに光明と幸福を」

――光明と幸福はあなたの中にある――

あなたはこのごろ幸福にみたされていらっしゃいますか。何をするにも明るくて健康でたのしくて、小鳥にも喜びをささやかなくては居れないほど幸福にみたされていらっしゃいますか。

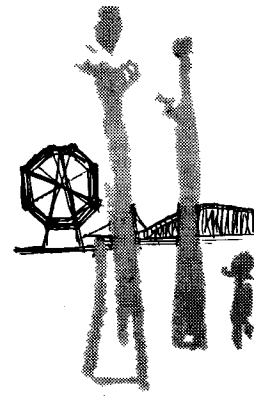
ふところが暖かくなくても、ちっとばかり仕事がうまく行かなくても、まわりの人間があなたに同情的でなくても、「上を向いて」口笛をふきながらさっそうとあるくほど幸福にみたされていらっしゃいますか。

あなたは同僚から「チェッ、酒をのまないなんて。出世はできんぞ」と言われても、上役の人から「君、社長のすすめたお茶を辞退するなんて。よく考えてみたまえ」と言われても、心の中にほんとうに平安と幸福とを感じていらっしゃいますか。

あなたは日曜日の朝、目をさますと、さあ今日は安息日だ、教会へ早く行こうと、いそいそとして準備をなさいますか。また「断食献金」や「什分の一」を納めるとき、心の中にあふれるような幸福感をもっていらっしゃいますか。

あなたは日曜日の朝、教会へ出るとき何となく重荷を感じていらっしゃいませんか。「断食献金」や「什分の一」を納めるとき心の中で抵抗を感じていらっしゃいませんか。心の底の方になにか消化しきれないよどみを感じていらっしゃいませんか。

もしそうであったら本気になって、その抵抗を感じさせる原因、不消化を感じさせる原因をてっていに究明して、日本晴れの明るさと満ちあふれるような幸福感とをとりもどさなくてはなりません。ほんとうの福音はあなたに「光明と幸福」とをみちあふれるほどに与えるはずですから、自分が「これこそほんとうの教会」「これこそ唯一の神の教会」とあかしをしていながら、神のいましめを行おうとするときに心の中に灰色のかげのようなものを感じたり、何となく抵抗を感じたりしたら、それこそ本気になって「ほんとうの福音」をしっかり自分のものにしようとしなくてはならない、のではないでしょうか。



一般に迷信だといわれている宗教を信じている人たちの中にも、一日でも教会へ行かないと気もちがわるいが、行けばまことにはればれとした気もちになって家業に精が出ますと言っている人があり

ます。「他山の石」というたとえがあります。私たちは本気になって考えてみようではありませんか。

私たちがふつう「教会へ行く」と言っている言葉の中には「今日こそお父さまに会える」という愛情にみちた感じがなくてはならないはずです。私たちの「生みの親」が「父なる神さま」であったら、その生みの親に会いにゆく日が重荷であったり、苦しみであったりしたら、私たちは「父なる神さま」をどう理解しているのでしょうか。

私たちが父おやの前に出ることを重荷に感ずるとき、私たちは心の底に何か「悪いもの」をもっていることが多いのであります。叱られはしないか、いやな顔をされはしないかという思いが先に立って顔をあわせることがいやになることが多いのであります。

しかし、思いきってあやまってしまうと、たいていの「おやぢ」は息子や娘よりも世の中のことをよく知っており、人間のうらおもてをよく知っているものですから、あやまったあとは前よりもはればれとした気持ちになり父と子としての愛情も深くなるというものです。

浮世の父にしてそうであったら、私たちはどうしてもっともっと縁の深い「霊の父なるお父さま」に対しておなじことができないでしょうか。

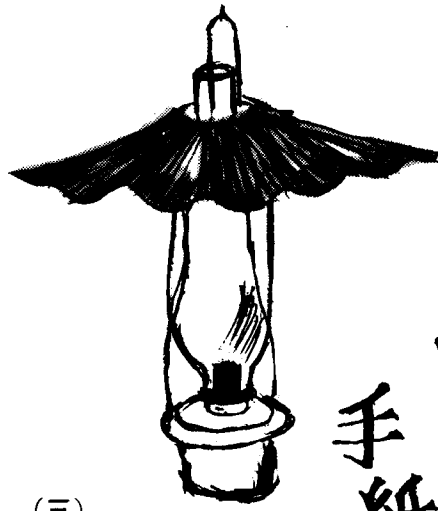
悔い改める者を見て神さまはまことにお喜びになり、ほんとうに祝福して下さいます。私たちは悔い改めさえしたらほんとうに祝福を受けるというのに悔い改めをしぶることがありがちなのはなぜでしょうか。それは私たちが「自我」というものをすてきれないでこれを大切にもっているからです。

どのような教えを聞いても、霊が向上するためにはかならず「自我」をすてなさいとすすめてあります。それほど「自我」をすてることは、「人間」が高く昇ることにとって根本的なことです。

「自我」が大切であると思ってこれをすてきれないでいる間は、心の底にかげがあり、よどみがあり、不消化な感じ、胸のつかえた感じをおこすもとになっているのです。それがやがて肉体の不健康、ひいては不幸な生活を招くこともあるのです。私たちは「光明」のかげとなり「幸福」のさまたげとなるこの「自我」をすててしまいましょう。そして「くだけたこころ」「悔い改めた精神」をもって「父なる神さま」の前に出て祝福をいただき日本晴れのすがすがしい気持ちになりましょう。

ある求道者への手紙

（三）



近況いかがですか。ほんとうに夜がながくなりました。晩ごはんのあとでひとかたずけしたら茶の間でゆっくりラジオに耳をかたむけていらっしゃるお姿が目に浮びます。クラシック、民謡、歌よう曲など好きずきによって聞き入っていらっしゃるでしょうが、部屋のすみからこおろぎの伴奏が耳に入ってくるのもご愛きょうですね。

古典落語に「二人旅」というのがあります。あの中でわらじに足をくわれて弱りはじめた仲間を、もう一人がまわりの景色を紹介しながらはげましているところがあります。そして、むこうの山にはえている松の木の枝ぶりなど好いではないかと言うと、仲間がおれにはいっこう見えないと言います。そこで腕をのばしてその松の木を指さしながら「おれの指のさきを見ねえ」と言いますと「きたねえ爪だなあ、まっくろだぜ」と答えるので聴衆が笑いだします。

この話をよく考えると、笑いとばしてすましてしまえないものがあるようです。笑われているのはこの話の中の「熊さん」（または八さん）のことなのでしょうか、それともひょっとしたら自分自身のことではないでしょうか。ちかごろは人にはレジャー、物にはデラックスというわけで休日ともなれば乗物は超満員、あるよく晴れた夏の一日、ビルの上から強力な望遠鏡で富士山を見たら、五合目から頂上ちかくまで登山者がアリのようにつずいていたそうです。これは本当の話で。また神社仏閣観光地、乗鞍のてっぺんまでバスで乗りつける御時世ですから、お年よりでも足弱わでも押すな押すなと観光地めぐり。

大正のはじめに（古いお話でごめんなさい）東京で博覧会というものが開かれたことがあります。時は桜花らんまんと咲きほこる四月のはじめ、上野「しのばずの池」を中心にして華々しく催おされました。一生一代の大正博覧会見物というので、はるばる山のおくから出てきたお年より夫婦がありました。無事に東京見物もすんで村へ帰ってきたのですが、さて。さっそ

く集ってきたのが近じょとなりのおばさん連中「おもんさん。おめえこのたび博覧会見物をして来なすったそうで、おめでとうごぜえやす。ところでどんなものがあったかひとつおれたちにもみやげ話をして聞かせてくだせえ」と、まるでひざづめ談判です。

ところがかんじんの「おもん」ばあさま、もじもじいっこう口を開きません。聞き手の一同、やや色をなして、なんぼなんだってみやげ話の出しおしみをするなんて聖徳太子このかた聞いたことがねえ、とつめよりますと、ばあさましゅんと鼻水をすすりあげたあげく老の目に涙までためて「おらあ、こんなくやしいことはねえ」といきなり大声をあげたので、今度は一同があっけにとられました。いったいどうしたことだと聞きますと。

「おらあ村を出るときとっつぁまから、東京はえらい人ごみの所だから、おらとはぐれてはなんねえぞ。おれの帽子をしっかり見つめてついてこい、と言われたもんでね。行ってみるとはてさて大へんな人ごみだ。これやはぐれたら大へんだと、とっつぁまの帽子を一生けんめい見つめてついてあるいたんだ。さて無事に帰ったは帰ったけど、今何を見て来たと聞かれたら、おらの見て来たのはとっつぁまの古帽子だけなんだ。おらあ、くやしくてくやしくて」と涙ながらの話です。

これも笑いごとではありません。私たちも、おもんばあさまのとっつぁまの古帽子ばっかり見つめてこの世を過しているのではないでしょうかしら、すばらしいものが自分のまわりに山ほどならべてあるのに。

またバスにゆられて歌って飲んで、宿屋へついたら白河夜船あとで聞かれたらおもんばあさまを笑えない人もあるようです。いや、ばあさまの方がまだ良い方です。ばあさまは自分が見るべきものがたくさんあったことを知って反省をしているのですから。

私たちのまわりには「この世の良いもの」がたくさんあります。しかし「永遠」から見た「この世の良いもの」の中には、おもんばあさまのとっつぁまの古帽子の価値しかないもの、いや「まっくろな爪のあか」にも及ばないものがあるようです。

私たちの目をつけるべきものが「古帽子」か「爪のあか」か指がさしているかなたにあるものか、総明なあなたにははっきりわかっていると思います。

「もろもろの天は神の栄光をあらわし大空はその御手のわざを示す。この日ことばをかの日につたえ、この夜知識をかの夜におくる。語らず言わずその声きこえざるに、そのひびきは全地にあまねくそのことばは地の果にまでおよぶ」（詩篇第十九篇）この有名な聖句をあなたにささげます。聖霊の導きと祝福が豊にありますように。次の日曜日に教会でお会いできたら幸いに存じます。ご大切に。

支部だより

金沢支部

さわやかな秋となりました。

扶助協会の皆様如何でしょうか。私たちは家族的な雰囲気のうちに中井姉妹を中心として、仕事会に精出しています。

赤、ピンク、黄、みどり、色とりどりの小人の靴を思わせるレース編のハイヒールを作りました。並んだ靴にリボンをつけて「赤い靴」のバレリーナーを想像しながら……

又染色の筆をふるっております。のれん、オフトン等、いろいろ図案を考案して、非常にたのしくなります。

染色の道にベテランの林姉妹を仙台支部より神様は、金沢支部に下さいましたことを本当に感謝しております。小さいながらも互に力を出し合い助け合いつつ運営されています。

人生経験豊かな終始変ることなく神の門をくぐりその階段を一歩一歩忠実に歩いていられる野田鶴枝姉妹に社会学を学び、神を忘れることなく、姉妹達に野辺に咲くすみれの花をおもわせる様な杉本姉妹に文学をうけもっていただき、神の僕として幾度も召され、その道を多く人達にわけ与えていられる堀姉妹に神学を学びつつ、良き娘、妻、母としてのつとめに、はげみながら一日一日の歩みを進めております。

扶助協会会長　亀井　政子姉妹
〃　第一副会長　村井よしえ姉妹
〃　第二副会長　中井　春子姉妹
書　記　林　満喜子姉妹

八月十六日、金沢の南石川群鶴来町に位置している、標高五百数十メートルの山に登りました。このハイキングの為に数日前から地図をにらみ時間表を繰りして計画を立てました。石川線の電車に乗り「ヒノミコ」で下車、僅か数分歩いただけで「倉ケ獄登山口」と記した道標が目につく、当支部では、いつも一時間余りで行ける処へは度々行ったことがありますがこの様な大規模なハイキングは始めてで少々心配しておりましたが、日頃知恵の言葉を守り体をきたえている為か、皆元気に登りました。途中、岩場があり、かなりの傾斜に姉妹達の中には足のすくんだ方もあったようですが、兄弟達の助けにより、ぶじ通過、又樹立の中より時折開ける視界に思わず立止り、主の造りたもうた、けっさくを心の中で讃美致しました。

ちょうど、その時、支部訪問中の巡回宣教師の井上長老とウィルキンセン長老の二人を交え、六人の宣教師と共に、十九人の兄弟姉妹達と、わきあいあいの中に楽しい一日を過しました。

八月十六日、早起きしてモルモンの友と倉ケ岳へ登りました。いつもおしゃべりな姉妹も唯もくもくとして汗を流して歩き、活動的な兄弟も、慎重に岩場を登っていきました。やがて頂上に立つと、さらに高い山々が連なり、下を見ると美しい平野と平和な村落が眺められました。山の空気、樹木、美しい眺めは純粋で本物です。そしてモルモン達の友情も本物だと思います。あなたは反対したけれど、私は本物の仲間になります。

甲府支部

各支部の兄弟姉妹の皆様お元気ですか？甲府の秋も深まりぶどうの最盛期となりました。郊外の昇仙峡も緑の谷間から紅葉の渓谷に衣替えをしました。どうかこちらへお訪ね

の節は教会の方へも足を向けて下さいませ。

さて〝読書の秋〟と申しますように当MIAでは山本美枝姉妹と八代栄太郎兄弟の指導のもとに〝高価なる真珠〟アブラハムの書をテーマに旧約聖書を参考書として討論や研究を皆熱心にしております。

又活動のクラスに於いては特に求道者の方々が先ず教会に親しむように午後五時三〇分～六時四五分の英語会話のあと英語会に来た沢山の人々が気軽に参加出来るように山本美枝姉妹と坂本道雄兄弟が中心になってフォークダンスやソシアルダンスを主として行っています。特に世界民謡の中からポピュラーな曲を選んで、宣教師達、会員達、求道者達がより親しく睦じくなるためのよい機会を作っています。特に力を入れてやっています。

それはとりもなおさず、教会の進歩と発展のための原動力となり、これから立派な兄弟、姉妹が誕生する信仰と門となるよう期待しています。

○宣教師主催親睦会開かる！

九月には二回。土曜日の六時半からウオルズイ長老（支部長）イーガン長老、マーロ長老、アール長老と四人の宣教師の頭をしぼった？素晴しい会が催された。第一回目はお菓子など巧みに利用したゲームで集ったすべての人々を暖かい雰囲気で包んでくださった。

このように宣教師の人々は小さいながらも強い支部にと日々努力して下さっています。

室蘭支部

各支部の信仰熱き兄弟姉妹、お友達の皆さんお元気ですか！室蘭支部で本当に長い間、支部便りを出さなかったことをお詫び致します。ここに支部の現在の姿を多くの兄弟、姉妹、お友達の皆さんに知ってもらえますことを感謝しております。室蘭も十月の声を聞きますと、もはや、涼しさはどこへやらで、寒さの方がジーンと胸の底の方へと落ちてまいります。そして又近頃では北海道各地で初雪の話をちらほら聞くことができます。この様に冬に向って進む室蘭地方の中で信仰熱き兄弟、姉妹が美しい教会に心を燃してつどっております。室蘭の教会は小さいですが末日聖徒の教会の中では教会らしい建物と云えるでしょう。そしてこの様な教会につどえますことを日々、心から感謝しております。

八月にもどりまして。三月から八月まで支部長として活躍して下さいましたスチィヴンス長老が伝道を終えて、米国に帰られました。長老は日本語の勉強が好きで小学校、中学校、高校等の国語、社会、英語の教科書をドッサリ買いこんで行きました。又、テープレコーダーには日本語（スタンダードの）をたくさんふきこんで行かれましたので米国に帰ってからも大いに勉強してもらいたいと思っています。長老は日本語の勉強をする為に交通をしたいとの事ですから、長老を知っている支部の方は大いにレターを出してあげて下さい。短期間ではありましたが支部において、多くの会員の家庭を訪問され、支部発展のためにつくされました。送別会では多くの兄弟、姉妹、求道者の方々が出席され長老を送られ、又駅への見送りも非常に多くの方々が見送りされました。長老の上に神様の祝福が大いにありますように。長老の努力が実って支部で初めて日本人の支部長が生れました。そして九月の地方部大会で完全とはいえませんが支部長会ができて、私達一同、心から喜んでおります。支部長会がこれから支部の為に努力する上に神様のお力が与えられますように一同祈っております。支部の責任が大きく変ったので知らせましょう。

◎支部長会

支部長	川崎　英三兄弟
第一副支部長	川上　輝男兄弟
書記	金子　長老

◎日曜学校

会長	柏倉　仁兄弟
第一副会長	神野　房公兄弟
第二副会長	高本　啓一兄弟

書記　直江　豊蔵兄弟
図書　中村　幸子姉妹
オルガニスト　佐藤　京子姉妹
指揮者　川崎　節子姉妹
Aコース教師　川崎　節子姉妹
Eコース教師　川上　輝男兄弟
◎子供日曜学校
責任者　越谷登志子姉妹
書記　川上美恵子姉妹
◎MIA
YMMIA会長　三浦　忠雄兄弟
YWMIA会長　今田　朝子姉妹
非専任宣教師　井口　和子姉妹
小坂　城子姉妹

九月のバプテスマ
日向ひろし兄弟
高橋　久子姉妹

名古屋支部

○結婚のお知らせ

現在西中央地方部日曜学校責任者として、忙しく教会の為に奉仕して下さっている名古屋支部の古芝健三兄弟は、同じ名古屋支部の早川みち子姉妹と、十月二十五日に支部教会堂にて結婚式を挙げることになりました。

また、元名古屋支部でMIAの会長をしておられ、現在東京で仕事をして居られる日坂遜兄弟は、名古屋支部の伊藤知慧子姉妹と、十月二十日にやはり支部教会堂にて結婚式を挙げられます。

皆さんがこの記事を読んでいらっしゃる頃は二組の新郎新婦は、新婚旅行も無事に終え、幸福なスタートを始めていらっしゃることでしょう。

○バプテスマのプールを始めとして、レクリエーションホールやブロックの塀に門などと名古屋支部の建築工事は着々と進んでおります。結婚式までには工事も完成する予定です

今月はこの新しく出来上ったプールで九人もの会員が誕生されました。次に新しく誕生された会員の名前を御紹介しましょう。

正井文夫兄弟、磯村久男兄弟、佐々美智子姉妹、佐々司朗兄弟、木沢倉兄弟、森下好美姉妹、庄司靖夫兄弟、庄司貞子姉妹

○カーティス・ウィルソン長老は九月三日朝沖縄那覇支部へ転任しました。後任として、リンカーン・コガ長老が阿部野支部から同日夕刻名古屋に到着しました。

○新しく変更された役員は次の通り。

YWMIA会長　中野　靖子姉妹
YWMIA副会長　丸山　東子兄弟
扶助協会会長　近藤　和子姉妹
扶助協会第一副会長　木村　常子姉妹
扶助協会書記　八木沼節子姉妹
系図委員会書記　住友　妙子姉妹

岡町支部

○九月二十九日、週末の夜のひとときをお母さんと一緒に、扶助協会主催の食べよう会『今宵をママと』が開かれました。一人でも多くのお母様達に来て頂くため、新しくいらしたお母様達のみ会費無用「御紹待」としゃれました。さすがは扶助協会、PRも兼ねていたらしいです。（お父さま方、モウシワケナイ）この日の利益は全て扶助協会の人達のはり切ること、出席者は六五人、扶助協会の食べよう会はデラックスで良いとの評判どおり、皆満足そうな顔で後の新しい方々の紹介、歌やニュージーランドの映画を楽しみました。

○宣教師移動

ハヌナ長老（室蘭支部へ）
スミス長老（オレゴン州から）

○九月三十日午後五時から西宮支部と合同のファイヤーサイドが箕面で開かれました。西宮支部との親睦の良い機会でした。

東京南支部

九月のバプテスマ

平石和敏
葛籠貫都

渡辺洋子
執事

チャーズ田畑兄弟
宣教師の移動
ウイルキンセン長老（福岡）
エグレジン長老（北支部）
ヒーテン長老（旭川）
それぞれ転勤されました。
ヒルトン・J・ルイ長老
福岡支部より南支部に転勤されました。

六一年度MIA、有終の美を飾るべく「約束しましょう」は副題「九月になれば」を設け（九月になれば何事が起るか想定して寸劇を行う）各クラス絵画、スピーチ、音楽、バンド）がこの一年間の努力を生かしてそれぞれ発表していただきました。

○当日は庭に照明をつけ野外劇場のごときムードに満ち、中川紀世子姉妹の司会によって求道者、会員、宣教師と全員が出場し楽しい夏の夜の一時を過しました。

MIAファイヤサイドは九月第一安息日に二十四名の参加者を迎え坂本兄弟の助けにより〝映画（フォスターの生涯）と音楽の夕べ〟を開きました。

扶助協会主催の「食べよう会」（会費百円）は九月二十九日、六十名余り参加して宣教師によるゲームがあって楽しい一時を過しました

西の宮支部

九月一七～二三日　支部大会
大会テーマはO／C（58）27～29

九月二十日　MIA大会
MIA西中央地方部、指導者の田口御夫妻（西宮支部は古巣ですが）を迎えまして支部長のお話を始じめMIAの責任者のお話をエンサイン、ローレルのコーラスをはさんで聞きました。その後はゲームで楽しく過しました。

九月二十三日　一般大会
評議員の周藤兄弟を始め柳田御夫妻を迎えて聞かれました。テーマである〝自由意志によって善き業に従い正しい事を為し遂げよ〟について信仰のあつい兄弟姉妹がそれぞれの立場から熱心にわかり易く話され、神様の教えを一層深く理解する事が出来、又心の糧をたくさん頂くことが出来ました。続いて、聖餐式にはこの朝バプテスマを受けられた二人の姉妹の按手礼がほどこされ新しく神様の道を歩む事になりました。

支部長会は次の通り支持されました。
支部長　中川宗幸兄弟
第一副支部長　沼野治郎兄弟
書記　福屋航二兄弟

狭い集会場はぎっしり詰められ、それでも座りきれないで廊下に座って居りましたので、聖餐式の終る頃はすっかりくたびれてしまいました。その後、扶助協会の大会が柳田姉妹の管理の下で開かれ姉妹達にとってとても意義深いお話があったにもかかわらず、若い姉妹の出席が少なかったのは残念に思いました。

話の一部分をのせたいと思います。教会の会員と結婚する様に、その為に九九才まで待っても遅くはない。必ず神様は良い時期に結婚出来るように導びいて下さいます。その為にいつも準備をしていなさい。又柳田姉妹は、教会の集会には、すべて出席しなさい。神様は私達が色々の方面で進歩発達出来る様に私達に必要であるから用意して下さっています。すべての機会を上手に使う事によって良き姉妹になる事が出来ると話されました。

九月二十七日　オープニング・ソーシャル。

有志の方によって庭の草が刈られ水をまいて多くさんの兄弟、姉妹と共にフォークダンスをしました。ダンスの間にゲームや塩沢長老の投縄の妙技に一同目をみはり中には挑戦する兄弟もありましたが、誰も長老にかなう者はありませんでした。塩沢長老は六才の時から投縄の練習をされているそうです。肌寒い夜でしたが身心共に温かく過ごす事が出来ました。

蛙（かえる）寒（かん）

「足、懐手に向って曰く、手には手の役あり。足には足の役あり。それぞれの役を勤めて一身の助けをなす。しかるに、汝ややもすれば、わがままを働くことこそ、遺憾なれ。もっとも指が動くの、手が長いという御法度は背かざれども、毎日々々手持不沙汰をしたり、懐手して無礼をしたり、火鉢にあたれば手の裏かえし、癇症という病なるか、幾たびも手を洗いに立つ。その度ごとにわれを遣うこと、水のごとし。立居は足の役目なれば、堪忍して勤むれども、堪忍のならざること一つあり。われ、一日歩きくたびれ、つまずいて休息すれば膝の上に手を置いて休息の間も休足させず。これは堪忍ならざるところ、なんとまた無遠慮ならずや。この以後、われら、休足の間には、あたまへなりともあげて置け。必ずひざに手を置かざれ。

手、頭をふって曰く、われは上に居て尊く、汝は下に在りて卑し。いやしきものの尊きものに従うは、常の道なり。しかれども、もと一身の枝葉なれば、相身互いに助け合い、汝の痒ゆきときはかいてもやり、痛むときはなでてもやる。足袋をもはかせ、草鞋をもはかせ、折には垢ぎれもそくうてやる。寒冷の時節には、手ずから炬燵もしてあたらせ、風呂にも、まず汝が先へ這入らずや。なにはともあれ、あまり、よしあし言わぬがよい。ひざ一本にて一身を養うにもあらず。指の間に筆をはさみ、花鳥風月かきたりとて、商が一銭二銭のこと、笑止や、汝、筋違いしたそうな。指先きに力を入れ、工夫してものいえと、手短かく恥かしむれば、足は立ち上って地駄太ふみ、よいよい、何所ぞで、よい物を踏んで、汝に洗わしてこまそうと行くを、引留め、一朝の怒りにその身を忘るるは汝がことよ。手に恥を与えんとして、まず、己れが辱をかく。その恥辱。一身の恥辱ならず。血で血を洗うというものにて、血で血を洗わば、先きの血は除きもせん。あとの血で、またよごす。手の恥は足の恥、足の恥は手の恥なり、兄の恥は弟の恥、弟の恥は兄の恥、その恥辱を及ぼす。身は親の枝なり。兄も弟も、もと一と株の枝葉なれば、兄の困窮は、弟の困窮、弟の難渋は、兄の難渋なり。

されば、

咲くとは花の数にはあらねども、散るにはもれぬ山桜かな。

かかるよみ歌もあるぞかし」（脇坂義堂）

（その二）

アラビアの商人が、十七匹のラクダを持っていた。長男にはその二分の一を、二男には三分の一を、三男には九分の一を与えることを遺言して死去した。これでは分けようがない。兄弟たちが困っていると、知恵のある老人が分けてやろうということになり、自分の家から、一匹のラクダをつれて来て、十八匹にしておいて、長男には九匹、二男には六匹、三男には二匹とそれぞれ遺言の通りに分け、残った自分の一匹を連れて帰った。

音楽の窓 (1)

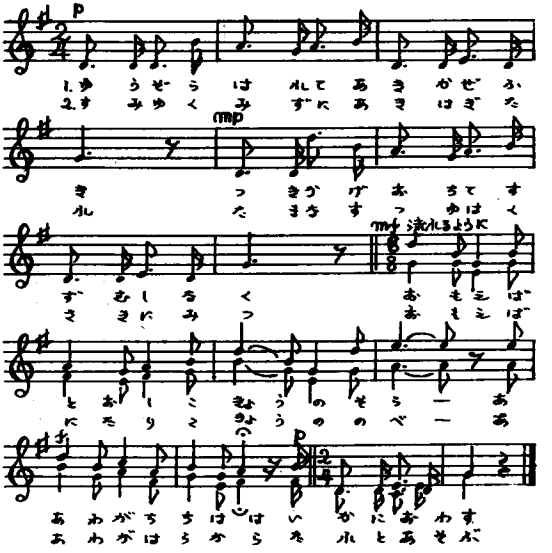
中央の山は北アルプスの一山 2763*m* の燕岳です。中腹の中房温泉と頂上からみる槍岳を初めとするアルプスの絶景で有名です。

初めに言葉あり――私達の機関誌〝聖徒の道〟も、編集者各位及び協力してくださった会員の皆様の努力により増々発展し、九月号からは一段歩を進め新しい発展の段階に入りました。私もこの一端をになえればと思い、貴重な一頁をいただき〝音楽の窓〟と云う名で毎月皆様にお目にかかりたいと思います。よろしくお願いいたします。

この〝音楽の窓〟では内容を二つに分けました。一つは〝今月の歌〟で、もう一つは音楽に関係のある物で、豆知識程度に扱いシリーズ物として登場致します。〝今月の歌〟は、新しい歌を簡単なコーラスの出来るように二部合唱にして登場していただき、解説はだいたい今月のような形式でやって行きます。兄弟姉妹とお友だちと、教会で屋内外で楽しく唄っていただき、心にハーモニーを持ち共々に和して楽しい信仰生活のいち基いとしていただければ嬉しいです。シリーズ物は来月からは〝鑑賞の手引〟と云う題でレコードその他の豆知識をのせます。

今月の歌

スコットランド民謡
渡辺欽雲 編曲



【解説】 この曲は皆さんよく御存知の曲です。が、ちょっとちがっています。楽譜をみてよくお分りと思いますが、後半がワルツテンポになっていて、最後の二小節が元の調子に戻っています。この歌詩は誰か日本人が作詩した物と思われます。原歌詩はかわいい子供の歌で〝女の子がスカートをぬらさぬように両手で持上げて、RYE(小川の意)に入って楽しく遊んでいます岸にいる男の子は、両手が使えないのをチャンスとばかり川にとびこみキッスする〟と云ういややみのないかわいくこっけいな歌です。〝麦畑云々〟とありますがこれはRYEを麦の意に訳した所から来たのです。

歌い方としてはワルツの処で流れるようにもなっておりますが、余りゆっくりしたり歌謡曲風にだらだらしない様にして下さい。また遂最後迄ワルツで唄いがちです。〝誰と遊ぶ〟の所2/4に戻りますからお忘れなく。では楽しく歌いましょう。

子供の日曜学校ガイド（十二月用）

早やばやと雑踏をぬって聞えるジングルベルの音と、ともに今年もクリスマスの準備をする時がやってまいりました。

何といっても、子供たちの夢は白いおひげ、赤い服、サンタのおじさんからのプレゼントでしょう。しかし、それだけのクリスマスで終ってしまうのはとても残念に思います

各支部とも、色々と楽しいプログラムを考えていらっしゃることでしようが、ここに参考までに載せておきます。

例年のことながら、各支部とも子供の出席数が増加します。その状態を長くもちこたえられるよう、しっかり準備しておいてください。

クリスマス特別プログラム

15分

開会の歌　#42　きよしこのよる
（子等は歌う）

祈　り　（註・イエスをこの世にお遣わしくださったことを父なる神に感謝する）

聖句ろうどく　マタイ伝二〇九～十

お　話　子供の日曜学校管理者
（あなたが、子供の頃のクリスマスの思い出等）

30分

分級　各クラス共、この良き日にふさわしいレッスンをしてください。

上級　イエス様は何人のためにこの世にお生れになったか？（救いの計画を話し合いましょう）

中級　のぞき箱（一月号62年度）を使って、イエス様の降誕の頃のお話。（輝く新星十一月号61年度）参照

下級　イエス様も子供の時がありました両親と共に過された幼きイエスについて、紙芝居、フランネルボードを使ってお話しする。

復　級

全員でクリスマスの歌をうたいましょう。

27分

1　#207（大人の讃美歌より）
もろびと、こぞりて

2　#205（大人の讃美歌より）
天には栄え

3　ジングルベル（歌の途中でサンタクロースの登場、プレゼントを配る）。

3分

閉会の歌　#210（大人の讃美歌より）
ああ、ベツレヘムよ

祈　り

注意事項

1　プレゼントについて

決して無理にプレゼントを用意しなくとも良い。先生がたが一生懸命、クリスマスの本当の意味を子供たちに理解してもらおうと、色々と準備し、それを教えてくださるだけで、もう立派なプレゼントなのです。

前からこの日の為に予算がある支部は準備しましょう。出来れば先生がたの心のこもった手作りの品が含まれば最上です

小さな聖句挿入カードも一緒に包みまし

よう。何名位の出席があるか、よく調べて少し余分に用意します。

2　サンタクロースについて

プレゼントの準備の出来た支部は兄弟にお願いしてサンタのおじいさんになってもらいましょうか。

服装を揃えるのに大変なことと思いますが紙で作ってもいいし、工夫してください。

3　室の装飾について

クリスマスツリーがその大半を占めますが、MIAと協同で使わせていただくのは如何、または紙に書いて黒板にはってもいいですネ

では良きクリスマスを迎えられますように心からお祈りしております。（その他参考資料は十一月号61年度をごらんください）

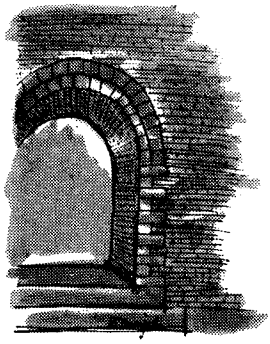
〝クリスマスカードを作りましょう〟

店頭には、たくさん美しいクリスマスカードがずらりと並び、どれにしようか迷ってしまうことがありますネ

しかし、これから作るカードは、どこにも売っていない独創あふれたカードです。そして何よりもまず作る人の真心がこもっています。是非作ってみましょう。活動の時間でも利用してアイデアにとんだ美しいカードを作りましょう。年賀ハガキ等にも応用できます

材料　画用紙、クレオン、えのぐ、のり、はさみ、千代紙（折り紙）、リボン、水彩絵具

カードができましたら、内側の言葉の書きかたを教えてやってください。きっと皆さんは、素晴らしいカードをたくさん作ってくださるでしょう。



日曜学校ガイド

12月用

クリスマスプログラム

早いものでもうクリスマスが近づきました。（この原稿は十月初めに書いているので、特に早いなあと感じる！）。さて例年通りソルトレークの日曜学校協会から、そのときの日曜学校のプログラムが提案されてきておりますので次に飜訳して書いておきます。これはあくまで提案ですから支部に応じて適当にかえても結構ですが、趣旨は是非とり入れて下さい。

十二月二十三日クリスマスプログラム

敬虔な前奏
開会の歌　二〇六
開会の祈り
挨拶　支部長会々員
斉唱　二〇七
聖句朗読（男）　ルカ伝二・一、三〜五
（女）　〃　二・六、七
（女数人）〃　二・八〜十の「…御使は言った」まで
（男）　ルカ伝二・十の「恐れるな…」より　十二節まで
（女）　ルカ伝二・十三
斉唱、あるいは合唱　一九九
聖句朗読（男）ルカ伝二・一六
（女）マタイ伝二・一、二、九、十
（男）〃　二・十一
斉唱　二〇〇
聖句朗読（男）イザヤの次の予言は、かくて成就された
朗読者全員　イザヤ書九・六
福音研究　クラスに分かれてイエスの誕生とその意義についてのレッスン
閉会の歌　二〇八
閉会の祈り

尚これらの聖句は是非**口語訳**を用いて下さい。

一九六三年度のテキスト

来年度の日曜学校のテキストが次のようにきまりました。

A（中学生）旧約聖書物語　百五十円
B（十五才〜十七才）福音の実践　二百円
C（求道者、一年未満の会員）福音の紹介　二百円
D（系図のクラス）家族の昇栄　二百円
E（一年以上の会員）奇しきみわざ二百円

今年のテキストの売行きは、印刷の遅れなどで非常に悪く、テキストを用いない支部が

かなりありました。「御霊の導きのままに話します」などとテキストなしでいわゆる講義調でレッスン（いや説教）をやる人、自分の考えを中心に福音を話す人、いろいろな本から大事なところだけ抜粋して話す人とさまざまな人に会いましたが、概してテキストがない場合は一貫したテーマや論理的な話の進め方が乏しく、先生だけの話だけで終る場合が多いようです。テキストを皆予習し、割当てを受け互いに話合って、始めて福音を深く理解できるのではないかと思われます。尚これらの本は一冊で実費四、五百円もしており、相当の赤字で出版しております。

十一月の中葉まで見本として一冊づつ各支部に無料でお送り致しますから**十二月十日まで**お金と一緒に支部長に注文して下さい。注文を受け次第、本を返送致します。「いと奇しきみわざ」は日曜学校飜訳の新刊書で空前のベストセラーになり売切れが予想されております。

日曜学校会長会並びに教師の皆様、どうかテキストが全生徒に持たれ、知性と信仰の支部として発展するよう努力して下さい。

日曜学校ノート

このたび、我々が全勢力を上げて日曜学校ノートを作りました。前にこの欄で「日曜学校には聖典、テキスト、ノートをもってきて下さい」と書きましたが、日曜学校にもってくるにふさわしいノートを作ろうと計画したわけです。表紙には美しいカラーのソルトレーク神殿を、数頁にかけて信仰箇条、教会重要事カレンダー、モルモン経年表などの資料などを載せており、必ずや全生徒にお役に立つものと確信しております。現在印刷中で十一月中葉までには二冊各支部に見本を送りますから、テキストと同様に**十二月十日まで**御註文下さい。

一冊の売価は**二十円**で実費二十八円のうち八円は伝道部日曜学校で負担しております。

特にここ二、三年の会員の増加は目を見はるばかりです。我々一人一人が宣教師としてこの栄えある伝道計画に協力しようではありませんか。

教会の伝道部（次頁の世界地図参照）

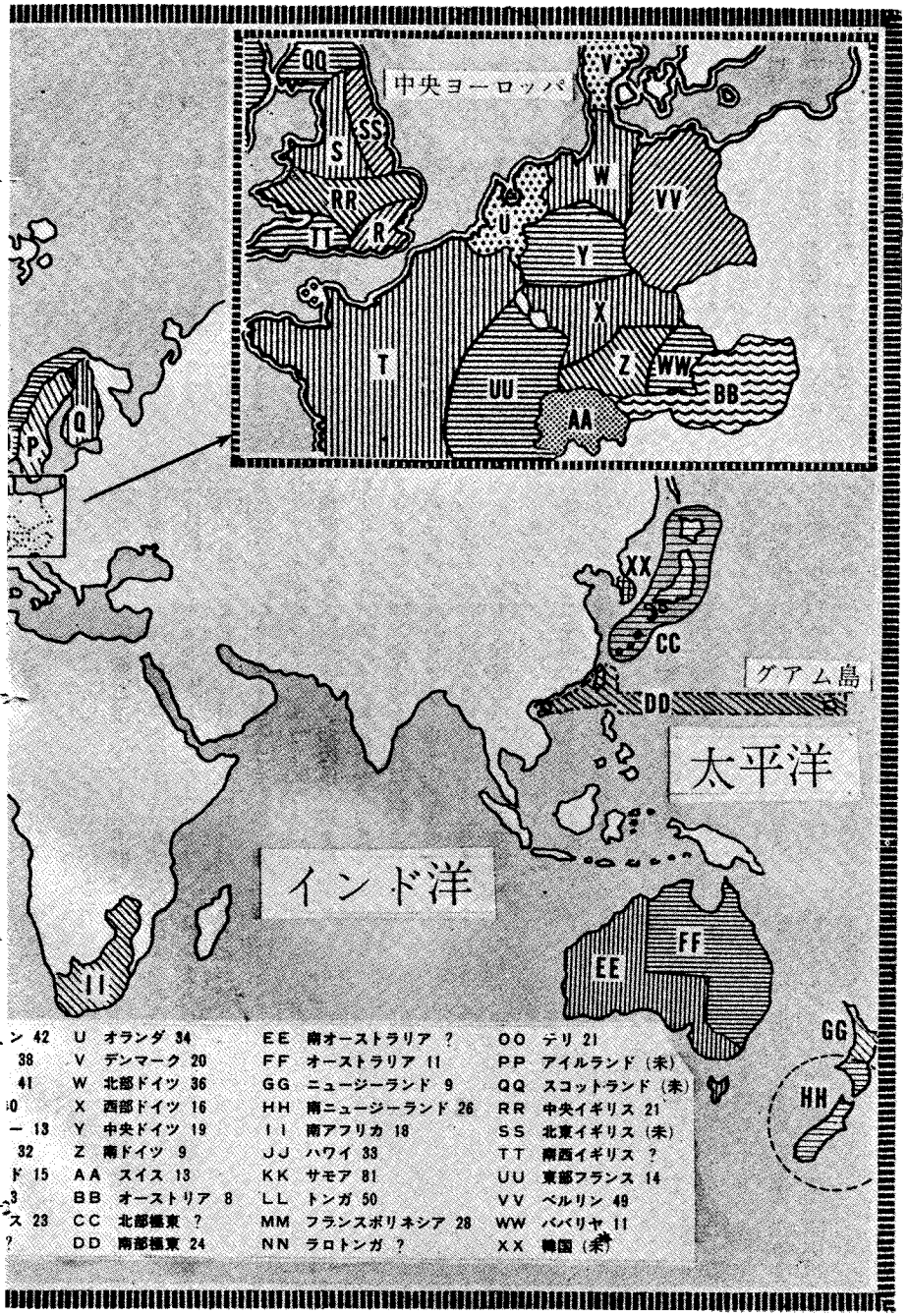
教会の伝道計画は毎年発展を遂げており、その改宗者は次の通りである。

一九四〇年	改宗者	七、八七七人
一九五〇年	〃	一四、七〇〇人
一九五五年	〃	二一、六六九人
一九五九年	〃	三三、〇六〇人
一九六〇年	〃	四八、五八六人
一九六一年	〃	八八、八〇四人

本部に送るレポートについて

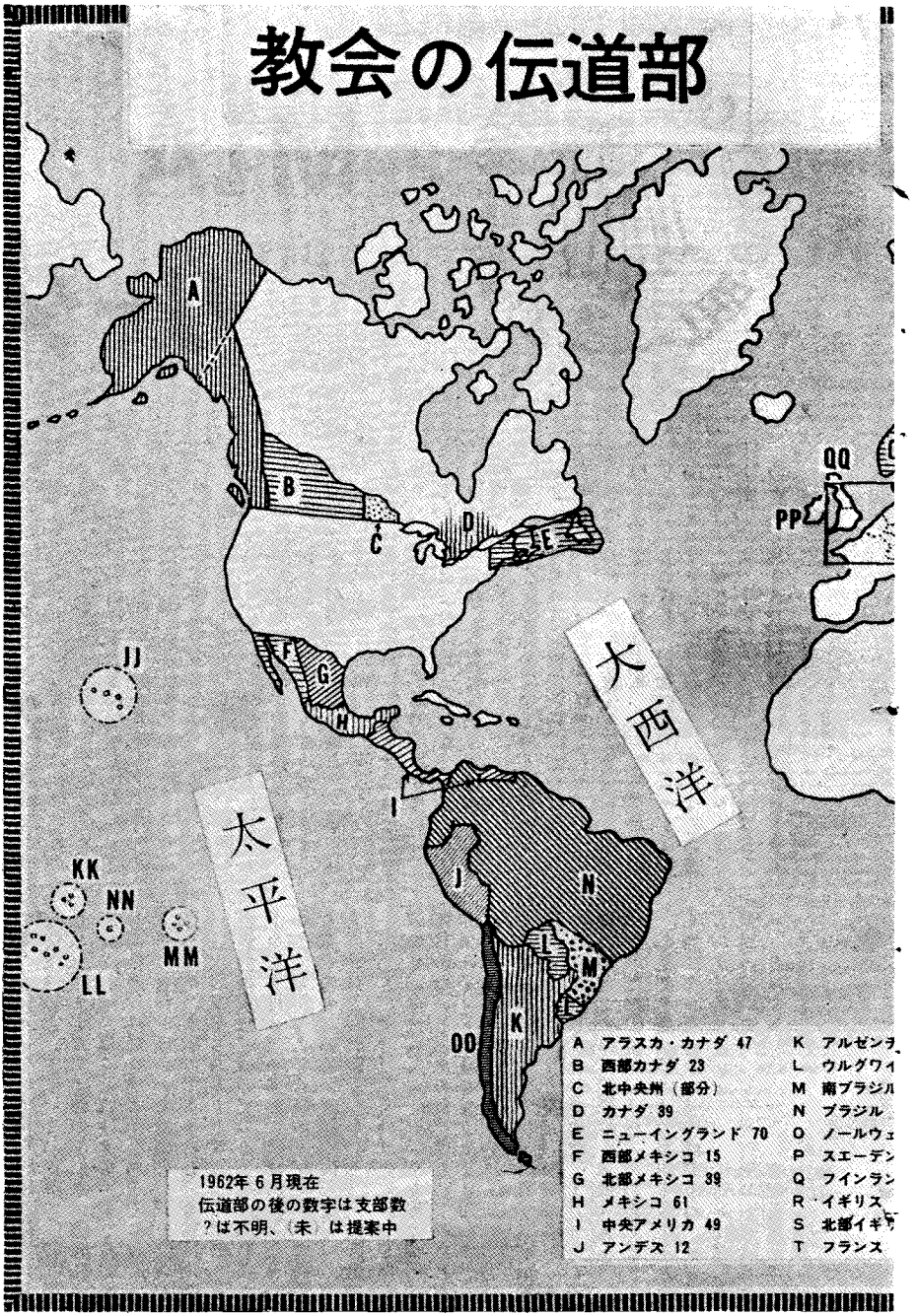
最近、伝道本部にレポートを提出しない支部が二、三あります。レポートは必ず毎月五日までに、前月分の記録を正確に送るよう心がけてください。特は登録人数の不明の支部不正確な支部が多いです。

また用紙は古い英文の用紙でなくて新しい日本文の用紙を使用されますようにしてください。



ン 42	U	オランダ 34	EE	南オーストラリア ?	OO	デリ 21	
38	V	デンマーク 20	FF	オーストラリア 11	PP	アイルランド (未)	
41	W	北部ドイツ 36	GG	ニュージーランド 9	QQ	スコットランド (未)	
0	X	西部ドイツ 16	HH	南ニュージーランド 26	RR	中央イギリス 21	
ー 13	Y	中央ドイツ 19	II	南アフリカ 18	SS	北東イギリス (未)	
32	Z	南ドイツ 9	JJ	ハワイ 33	TT	南西イギリス ?	
ド 15	AA	スイス 13	KK	サモア 81	UU	東部フランス 14	
3	BB	オーストリア 8	LL	トンガ 50	VV	ベルリン 49	
ス 23	CC	北部極東 ?	MM	フランスポリネシア 28	WW	ババリヤ 11	
?	DD	南部極東 24	NN	ラロトンガ ?	XX	韓国 (未)	

教会の伝道部


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
JJ
KK
NN
MM
LL
QQ
PP
大西洋
太平洋
A アラスカ・カナダ 47
B 西部カナダ 23
C 北中央州（部分）
D カナダ 39
E ニューイングランド 70
F 西部メキシコ 15
G 北部メキシコ 39
H メキシコ 61
I 中央アメリカ 49
J アンデス 12
K アルゼンチ
L ウルグワイ
M 南ブラジル
N ブラジル
O ノールウェ
P スエーデン
Q フインラン
R イギリス
S 北部イギリ
T フランス
1962年6月現在
伝道部の後の数字は支部数
?は不明、（未）は提案中

MIA リーダー

四二月二十日「クリスマス・パーティー」

今年もやがてクリスマスがやってまいります。イエスがキリストであると信ずる者にとって、クリスマスは真に意義深いものです。近年になって仏教国の日本でもクリスマスが多くの人に祝われるようになりましたが、その意味はまちまちで、ある場合に、商店やデパートの宣伝用であったり、ある時は、ナイトクラブの客寄せであったり、亦Xマスとして、何の日かよく意味も理解せずに、お祭りだとさわいだりしているのを見かけます。メシヤの降誕を待ちのぞみ、数々の〝しるし〟によって知らされた当時の人々の喜こびは、現在、イエスを信じる人達の喜こびと同じだったことでしょう。聖書の中に美しくのべられているキリスト降誕の物語りは、単なる神話や、子供達のための童話ではありません。キリストがこの世にお生れになったと言うことは、人類の救いの計画に大きな意義を持つのです。

そのことをよく知っているMIAの会員がクリスマスを祝うのですから、本当に楽しい意義深いパーティでなければなりません。

この夜のプログラム責任者はYM・YW・MIA会長会にあります。しかし各グループリーダーも責任の一担を持ち、プログラム参加に協力しましょう。亦支部のすべての会員に招待状を贈り、各集会場所にポスターをはりましょう。今月（十一月）の支部指導者会の折り、MIA役員指導者はこのプログラムの企画を立て各々委員を選んで、宣伝、装飾、進行等の係を定めましょう。進行の中には細かく分けて、ゲームの係、場内係、食事の係、プレゼントの係、等必要な係をきめる方が良いと思います。その支部に応じて予算もちがいますので装飾のことや、出される食事についても違うと思います。軽飲食の場合もあれば、晩餐を出す所もあるでしょう。亦あまり会員が多いので食事の一部を会員が支払うチケット制の所もあるし、食事は全額会員負担の支部もあることでしょう。どうぞ、会長会の人は、持っている予算に応じてプログラムを作って下さい。例年のことながら、楽しい夢を与えてくれるプレゼント(交換制)も高くてもせいぜい百円迄にしましょう。出来れば五十円が望ましく、その人の智恵で五十円でも、けっこう良いプレゼントが用意出来ます。会長会でプレゼントを幾つか用意しておかないと、その日、はじめて来たお友達やプレゼント交換のあることを知らなかった兄弟、姉妹が淋しい想いをすることになります。子供の夢であるサンタクロースが会場に現れると、やはり、美しい夜空の星が、キラキラと輝いて、トナカイのそりがやって来る様に想えますね。赤鼻のルドルフさんのお首につけた鈴の音が、ほら、聞こえて来ますね

聖誕劇を演じる人達の顔が生き生きとして本当にその当時の人達の様ですね。私も、貴方のクリスマスパーティーに是非出席したいと思っています。どうぞ支部の方々に私共の「クリスマスお目出度う」を伝えて下さい。

編集部からおことわり

今月号のみ「古代の使徒」より取ったレッスンを載せます。

なをこのレッスンは第四課五課六課に使用されるものです。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

第四課

誰でも、彼の生命が彼の種族に属するものだと、いくぶんか感じないなら、真に偉大なものになれない。神が彼に人類のために与えたものである。

もし誰でも、偉大なるものをさがし求めるなら彼は偉大なるものを忘れて、真理を求むるべきである。彼は偉大なるものと真理二つながら得ることであろう。人を真に偉大にするには、真に善良でありまた神の聖なるものを与かる以外にない。

▽偉大なる人の感化

誰でも偉大な人物に就いて、読んだり聞いたりしたいです。子供も大人もまた、昔の指導者が、彼等の立派な行為によって、この世界をよくし、また幸福にしたかに就いて学ぶのを喜びます。そして、長年たった後、誰でもこれらの指導者が、この世の為にしたことが、どれ程よいものかとまだ考えています。そして立派な望を持ち始めるようになり、今日の子供たちは、昔のこれらの英雄たちと競走しようと思うようになります。詩人ロングフェローが詩の中で、

偉人の生涯は、すべて思い起す
我らも亦崇高なる生活をなし得ると
又この世を去る時、我らの後に
時の砂の上に、足跡を残し得ると

とうたっています。

▽少年の理想

どの少年も、理想とする人物を持ちます。または多分一人で、理想とする人物を一人以上持ちます。例を挙げますと、いい運動家が居るとすると、少年は彼のようになりたいと思います。もう一人上手なヴァイオリニストが、居るとすると、少年はまたいつか自分は音楽家になりたい、もう一人能弁家が居りますと、其の少年はいつかは偉い演説家になりたいと望みます。

しかし時には、少年少女はまたこんなことで、彼等の理想に悪い人たちを選ぶことがあります。これは、つまらない本を読んだり、悪い人々と交わったりすると起り勝ちです。本当に不幸と云うのは、小さな少年が、ふと追はぎ、盗人のことを読んだり、聞いたりして、悪人に成りたいと、心に思い起すことです。またタバコを飲み酒を飲む、怠けながら一生を威張り歩くような人を、理想の人物として選ぶ少年は、何んと不幸なことでしょう

▽道　　標

このように人の生涯は、私たちにとって、道しるべのようなもので、有用な幸福な一生か、自分勝手な一生か、自分勝手なみじめな一生か、どちらへでも導く人生の道を指し示めし乍ら、道に沿って立っています。この世か、書物でか、最も善い高潔な友人を、さがすことは、最も大切なことであります。かの偉大な英国の思想家カーライルは、「偉大な人物は、どのように取り上げようと、利益のある友人である」と云いました。私たちは偉人を仰ぎ見て、不十分ではあるが何か得る所があります。偉人は生ける光の泉です、その泉が私たちの傍にあると気持よく楽しいものです。

▽偉大なるものの秘密

もしあなた方がこの立派な光の泉である人々の生涯を研究しますと、少くともひとつのこと、即ちどうして、この人々の名がいつ迄も覚えられているかと云うことを学びます。それはこうです。どの人もこの世をよくしようとして、生命のような重要なものでも捧げています。この人々は、よろこび、安楽又は彼等自身の為の「面白かった時間」などに暇つぶしをしなのみならず、世の中の人々のため幸福を計り、もっと世の中の人に楽をさせるように、働くことが、一番の楽しみでありました。世の中の人々は、この人々の名前も聞いたことがないかも知れませんけれども、

すべてのこのようなよいおこないは、いつ迄もこの世に生きております。

▽或る人々はどうして失敗したでしょう

たいへん古い話ですが、あるお星様の世界

から、一人の人が許されて、この地球の世界を見に参りました。高い山の頂上から、世界のいそがしい町だとか大都会を見おろしていました。何百万の人が、まるで蟻のようにいそがしく、宮殿のような歓楽場を建てたり、ながく続きそうもないことに精出していました。彼は帰る時にこう云いました。「この総ての人は、丁度鳥の巣のようなものを作るのに、無駄な時間を費している、失敗して恥をかくのも道理だ」と

マどうすればまことに偉大なものが作れるか

世のまことの偉大な人はすべて、鳥の巣以外の何物かを打ち建てております。彼等の意志とか、愛情の中の深い熱望から、真理の宝玉を持ち来らしています。その宝玉が、世の中を豊かにしたのです。彼等は愛と犠牲のおこないをしまして、それが何百万の人々に、思想感情を吹き込みました。そんな立派な行いをしながら、彼等は危害災難を蒙りました。多数の人は実に不慮の死を遂げました。然しこのように命を捧げた全ての人々は、彼等自身を救いました、私達は神様の為、又世の中の人の為に、命を捧げられた人々の行為は永久に生きています。

私達自身の為の行為は、永久に続くことがありません。

人の心に蒔きしもの
死することなしと人思う
命のくさりに結ばれしもの
死することなし

マリンカーン

何か偉人について聞く時は、その人についてどんなことでも皆知りたいと思います。どこで生れたか、両親はどんな方か、彼はどこに住んでいたか、どうして遊んだか、誰と遊んだか、どんな家に住んだか、泳ぎに行った所、魚釣りに行った所、その他色々あります例えばジョージ・ワシントン、アブラハム・リンカーンのこのようなことは大層面白いです。

哀れな少年リンカーンについて聞きたくない少年がいるでしょうか、リンカーンはインディアナ州の未開拓地の小さな丸木小屋に住んでいました。熊だとかその他の野生の動物がいる所の光景、彼が火の傍に坐って、石板紙、鉛筆を持たないのですから、木のシャベルの上に、木岩を使って、計算を習っている光景等、聞きたくない少年はいないでしょう

アブラハム・リンカーンは偉い善良な人でありましたので、私達は彼について何もかも知りたいですが、彼のようになるために幾分の助けとなる彼の子供の時のことですら、私たちは知りたいです。と云うのは、リンカーンが書きましたように「よい少年が本の通りにすれば、何日かは偉人になるでしょう」。

マ古代の使徒の少年時代のことは少しも知られていないこと

不幸なことに、私たちは昔の使徒の少年時代について、少しも知りません、その使徒たちのことをこの小さな本で読みましょう。私たちが成人後の人となりによって、多少少年時代にどう云う人であったかを、判断することができるのは本当です。然し少年時代青年時代の小さな出来事、それは彼等の性格を形づくるに役立つものですが、その出来事のなかに、私たちは今非常に興味があります。千九百年も経遊し、書かれてもないし又知られもしないだろう事でありますけれども、興味は深いです。彼等の名を不滅のものとしたこの世の為に、奉仕をする機会が来た以前に、彼等は成人に成長していました。

マ最も恵まれた人々

けれども一つの点で世の知る限り、彼等は最も恵まれた人々でありました。何故なら、世の救主と毎日、否毎時、二年半と云う期間、知り合う光栄を持ちました。

それで彼等は、真の偉大なものの実例を、絶え間なく見聞きしたので、偉くなったのも道理であります。彼等はイエスを愛すると同時に、イエスのようになりたいと望みました それで、イエスの教えをよく学び、イエスの言った通りしようとしました。確かにこのような人人と知り合うことは、善いことに違いありません。

マどうして使徒等は知られましたか

一寸考えでごうんなさい、彼等について何かを知っている只一つの理由は、彼等が救主に会って、彼等の一生の道標としたことであります。もし彼等がそうでなかったら、現在誰もこの人々がかって住んでいたことを知らないことでしょう。彼等は住んでいた、死んだ、そして彼等と同じ時代に住んで、死んだ

他の何千と云う人々と同じように忘れられてしまったことでしょ。そして誰も彼等について知りもしなければ、かまうものもない、丁度今日生きている幾千幾万の人々が時間を空費し、無用の生活に努力し、悪い種類の人々を理想としたり、神に奉仕する道のかわりに、歓楽と放縦の道に足をふみ入れて、生活していると同じようです。間もなく彼等も人生の旅の終りにたどり着くでしょう。そして誰も、彼等がこの世にいたから少しは世の中もよくなったとは云わないでしょう。毎日の終りにこのような人々が、彼等が見つけたような不毛の道をのこして行きます。即ちあとから続く人々の為、この世の中が甘美に、明るくなるよう、日陰になる木を道に植えない、バラの木を植えたりしない、言いかえて見ると親切な行いをしない、気高い奉仕をしない、不毛の地、実らない地、砂漠のような道、多分ソゲかアザミを振りまいた道のようなものであります。こう云う道を悪い人々はのこして行きます。けれどもイエスを道標に選んだ人は、こんなことをしません。彼等の生涯は丁度バラの園のようなもので永久に世の人々は美しい花をつむことが出来るのです。

第五課

古代の生活と環境

植物で青少年をたとえて見ると、結実した最初の果実で、未来に予期される物を知ります。

▽アメリカの死海

ユタ湖から北を流れるグレート・ベージンの部分を通り、アメリカの死海であるグレートソルトレークに注ぎ込むのをヨルダン川と云います。ユタ湖は真水で魚が多いですが、ソルトレークは名が暗示するように塩水でどんな魚も棲むことが出来ません。

ブリガム・ヤングと開拓者の一団にとっては、輝かしい七月の太陽の光を反映する塩湖を持つソルトレーク谷は、誠に約束の地でありました。

▽聖地の死海

大西洋を遙かに越えて、地中海の東海岸に沿うて拡がっているもう一つの塩湖があってヨルダン河があり又もう一つの真水の湖があります。そしてヨルダン河は〝約束の地〟又は「カナンの地」を通って流れています。けれども、もしこの地方の地図を参照すると、この海、河、湖の関連した位置が、丁度ユタにあるのと反対の方向にあるのがわかります

聖地では真水の湖が北にあり、ヨルダン河は南に流れて死海に入っています。歴史にこの三つの大切な点を含んでいる聖地には、数種の名があります。上にあげたように聖地、又はカンナの地又はヘブライの地、イスラエルの地、その理由はヤコブの子孫が一度ここに住んだことがあるからです。ユダの地ヤコブの息子の一人の名を取ってつけました。パレスタイン、多分御存じの羊飼のダビデの時代に住んでいたピリスチンの名を取ってつけました。

▽カナンの大きさ

ソルトレークは、長さ八十マイル幅四十マイルあります。カナンの地は長さも幅も約二倍あります。そして一番長いところが百七十マイル、幅は八十マイルあります。ダンの都は北部にあり、ビテシバの市の南部に在ります。それでダンからビアシバと云う言葉を聞いた時は、かれはかってカナンの全長を表わしました。

▽ガリラヤの海

聖地の真水の湖はまたいくつかの名を持っています。一船にガリラヤの海として知られ又チベリヤスの海、ヂエネサレスの湖、チベリヤスの湖又はセネロスの海と呼ばれており長さ十六マイル、幅六マイル程です。この湖は周囲が高い山で、只ヨルダン河のせまい両極端の入口と出口を除いて取巻いているちょうど鉢の底に湖があります。両側の土堤のさらに端の近くに位するカペナウンの町から見たこの海の光景は、まことに壮大であります一番長い所が殆んど北と南に走っています。両側の山の不毛の光景と全為森のないことはこの景色に重苦しい気分を与え、湖の死んだような静けさによって一層憂うつとなっています。湖の西側に重要なパレスタインの一地区があって、ガリラヤと呼ばれています。昔の著者が一時この地方に市や町が二百位あって、少くとも一万五千の入口があったと云いました（ヨセファス）。

▽シモンの家庭と少年時代

シモンの幼年時代、また少年時代のことについては確かなことは知られておりませんけれども、私共の知っている当時の人々の習慣、信仰、彼の時代のユダヤ人の行為から推断しても誤りは無いだろうと思います。即ち彼は小さな平らな屋根の家に何もない――もしあれば家具の少々があったでしょう――家庭であるか、学校であるか、もしくは多分両方で、彼は旧約聖書の中の古い予言者のことについて、全てを習っていたことと思います。そしてハッキリと安息日を習ったでしょう。数えられた最も大切なことは、いつか彼らの種族に、救主が現われる日のために待つことだったでしょう。想像で私たちはシメオン、アンデレその遊び仲間が、ガラリヤの岸辺で面白く遊んでいるのを絵にすることができます。しかしシモンの幼年時代の出来事を見ることができるのは、想像だけであります。彼について考えることができるとジョウジ・エル・ウィードが書いています。シモンが役に立つ子供で、お母様を家事のことで手伝する、注意深く小さな赤い土ランプを、芯を整えるため持って来ること、また煎るトーモロコシ、お父の獲って来た魚、料理をするのに使う木炭、焼ガマからパン、油、密菓子を、彼らの家の裏の小山から湖に流れ込む小川から水を、戸の傍の水がめに水を満す、これらのためにお手伝しました。始めて彼が木をゆすぶってオリーブを取って来て彼らの質素な食事の一部としてお母さんに差上げた時、彼はお母さんの喜びではなかったでしょうか。また彼がトーモロコシやヘンプを夏の日に乾かすために、平たい屋根に拡げた時、彼はお母さんの喜びではなかったでしょうか。また彼が始めて、船のかいをあやつり、正しく波にかいを入れたり、網を拡げるのを手伝ったり、獲った魚を数えた時には、彼はお父さんの誇りではなかったでしょうか。

彼は雀の飛ぶのを見つけたり、ケシや小菊やアネモネのような花を集めたり、偉大な教師から今はまだ誰であるか知らなかったですが、その偉大な教師が彼に知恵と愛とを教えたでしょう。子供らしく彼は湖岸で貝がらを集め、また棒切れで湖辺の白砂を掘ったり、ちょうど今日の子供が立派な玩具のショベルと小さい塗ったバケツを持って遊ぶのと同じようなことをして楽しんでいました。

漁師の中で、シモンが友だちと網や舟の周りをはね廻っているのを見て、彼が成長後世界中で一番偉い人の仲間に入るとは誰も思わなかったでしょう。

或著述家は、ガラリヤ人は一般に勇敢で恐れ知らずで、自由を愛したと云っています。大胆で不敵であったので、よい兵士になりました。少年シモンは成人するにつれて、彼の周囲の勇敢な大胆な人々を讃えたことでしょう。と云うのは彼自身もまた、彼の一生の最初に記録された例から教った所に依りますと、強い性格の男になったからです。

シモンの名変る

▽シモンはバプテストヨハネを聞く

シモンが成人となって間もなく、一人の男がヨルダンの荒野から来ました。その人はラクダの毛衣をまとい、腰に皮帯をしめ、大変な力ある言葉で説教しましたので、ユダヤとその周囲の国々の人々が彼の言葉を聞くためにやって来た程です。この人はバプテスマのヨハネで、キリストの前触れをした人でありました。彼の話を聞くために来た人の中にシモンがおりました。シモンは確かにこの悔い改めよと云って廻ったヨハネが、この世に人の子が来ようとしていると宣言したことを聞いて、喜んだに違いありません。シモン、アンデレとその幾人かの友人たちは、ヨハネの教えを信じました。

▽見よ神の小羊

ある日ヨハネが、彼に従う人々とベスバラ（この言葉は辻の所と言う意味）の近くに居た時、彼等の方へイエスが来るのを見て、「視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊、われ曾て『わが後に来る人あり、我にまされり、我より先にありし故なり』と云いしはこの人なり」と云いました。

また次の日多分朝の十時頃でしょう、ヨハネは二人の弟子と話しながら立っていました。それはシモンの兄弟アンデレとヨハネでありました。彼らの近くを歩まれて居るのが、バプテスマのヨハネが前日神の羔羊と指差した同じ人でありました。「イエスの歩み給うを見て云う『視よ、これぞ神の羔羊』かく語るをききて二人の弟子イエスに従う」とあります。

「信仰の必要」

イエスの教えをみると、いたるところに霊が一番大切であることが強調してあります。イエスは「導きとめぐみを施こすわざ」を始める準備として四十日間断食をなさいましたが、その終りにイエスの生涯における最も大切な時がやってきました。その時イエスのからだはひじょうに衰えていました。サタンはそのずるさを発揮して次の提案をいたしました。

「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんなさい」（マタイ伝四〇三）、イエスはこれを聞くとサタンの策略を見やぶってただちに「人はパンだけで生きる者ではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」（マタイ伝四〇四）とおこたえになりました。この短い言葉のやりとりの中で、「救い主」は物質上の必要を霊の必要の次にお置きになっています。

神を信ずる信仰はどうして身につけることができるでしょか。それには神の誡命を守って実行しなければなりません。したがって、信仰とは一つだけの美徳ではなくて、いろいろな気高い性質から成り立っていることがわかります。信仰は祈りと礼拝という敬けんな態度によくあらわれています。信仰のある人は、誠実けんそん寛大同情親切勇気などの美しい性質をもっています。このような霊の美しさをあらわす性質を養うならば、私たちは「聖霊の賜」を与えられる資格をもつのです。しかし、それには私たち自身が努力をして、自分の考えと態度とをいつも正しく保っている事が必要です。

ベンジャミン王は人間のもっている性癖を描写して次のように申しました「肉欲に従う人は神の敵であって、アダムの堕落してこの方そうである。しかし、人がもし聖霊の導きに従い肉欲に従うことをすてて主キリストの身代りの贖罪によって聖徒となり、幼児のように従順で柔和で謙遜で忍耐で愛情に富み、幼児がその父に従うように、主が負わせたもうたすべてのことに喜んで服従しないならば、とこしえに神の敵となるであろう」（モルモン経モーサヤ書三〇十九）。

神の誡命を守らない人々は自分の身を危険にさらしているのであります。これに反して悔い改めの精神は私たちの生き方を善い方に導きます。悔改めの必要なことはベンジャミン王がそのことばの中で説いています。ベンジャミン王はその説教が終ったとき、王の民が王のことばを信ずるかどうかをはっきりと知るために使いの者を民につかわしました。

「すると民は口をそろえて云った。まったく、われらは王の言われた言葉をみな信じ、またその言葉が確に真実であることを知っている。それはわれらの心を非常に改めさせ、悪を行う性質をなくして常に善を行う望みを与えたもうた全能の主のみたまによるのである」（モーサヤ書五〇二）。

信仰の最もよい例はわが教会の帰還宣教師に見られます。彼らは各自の心に得た喜びでかがやいています。ニーファイは宣教師の伝えることばが人の心をつらぬく力について「人が聖霊の力で語るときには、聖霊がその話を人の心にしみこませるからである」（ニーファイ第一書三十三〇一）と言っています

以上を総括しますと、イエスは信仰を、私たちが必要とするものの第一に置いておいでになります。神を信ずる信仰があらゆる正しいことの基であります。この信仰を得るために私たちは正しい思想と行いとを養わなくてはなりません。それは福音の原則に従うことによって達成されます。正しい行いの光は、聖霊の力を通して私たちからほかの人々へ放射されるにちがいありません。

伝道本部だより

バプテスマ　一九六二年八月

阿倍野
藤原竹子
長谷川喜代子
堀端和子
市道恵子
市道喜八郎
井上敬子
伊藤貞夫
伊藤十三
川島マチ子
小西園子
前平充弘
前沢喜代子
丸田美紗子
松尾澄子
三木笙子
南二三子

宮川淳
中島悦子
根来昭美
西尾啓子
大林博枝
尾立越子
尾立越美子
佐藤美千代
芝田節子
下農喜代美
甲田啓子
杉本昭子
辻岡剛
梅井信一郎

広島
藤村孝二
橋本忍
三宅友子
佐々司朗
佐々美知子
荒瀬吉子
倉田ヒサ子
佐藤節子
鈴木正美
桜井勝彦
山中喜代子
橋本昭子
角高碧
西祥美
奥谷弘
高田秀子
馬本武
山下セキ子

名古屋
礒村久男
正井文夫
武藤ユリ
永井洋子
瀬良ハル
瀬良美恵子
中田深雪
中村由美子
高木昭子
足利猛夫
市瀬幸子
井上綾子
熊野世都子
宮原明美
大柴圭造
品川洋一
高木良明
加藤由美子
平末邦子
宮沢昭信

阿倍野
宮川淳
涌田静子
森脇敏雄
向井恵美子
中島悦子
中田深雪
根来昭美
西尾啓子
有園宏子
大林博枝
足利猛夫
井上綾子
尾立越子
尾立越美子
熊野世都子
佐藤美千代
芝田節子
下農喜代美
甲田啓子
高木良明
杉本昭子
辻岡剛
梅井信一郎

広島
藤村孝二
橋本忍
三宅友子
武藤ユリ
山口アツ子
瀬良ハル
瀬良美恵子
中田深雪
中村由美子
高木昭子
足利猛夫
市瀬幸子
井上綾子
豊田仁子
宮原明美
大柴圭造
品川洋一
高木良明
加藤由美子
平末邦子
宮沢昭信

名古屋
礒村久男
正井文夫
佐々司朗
佐々美知子
永井洋子
荒瀬吉子
倉田ヒサ子
佐藤節子
鈴木正美
桜井勝彦
山中喜代子
橋本昭子
角高碧
西祥美
奥谷弘
高田秀子
馬本武
山下セキ子

新潟
荒瀬吉子
倉田ヒサ子
佐藤節子
鈴木正美
桜井勝彦
山中喜代子
橋本昭子
角高碧
西祥美
奥谷弘
高田秀子
馬本武
山下セキ子

西の宮
桜井勝彦
山中喜代子
橋本昭子
角高碧
西祥美
奥谷弘
高田秀子
馬本武
山下セキ子

岡町
橋本昭子
角高碧
西祥美
奥谷弘
高田秀子
馬本武
山下セキ子

京都
角高碧
西祥美
奥谷弘
高田秀子
馬本武
山下セキ子

執事
ハシモト　ヨエモセ（仙台）
ヨコヤマ　タダシ（小樽）
丸川邦夫（岡松）
重岡利夫（福岡）
坂井和治（〃）
野間竜一（〃）

教師
西田隆一（福岡）
コジマ　オキナリ（小樽）
マスダ　テルトシ（〃）
内山晴行（東京西）
南沢輝之（〃）

祭司
ヤマダ　ミチタヤ（小樽）

長老
才城城朝次郎（那覇）

伝道部扶助協会（ミッションマザー）長メッセージ

ペギー・ヒュイシ・アンダーセン姉妹

私たちは、伝道部を見てまわる旅行を近ごろ全部終りました。私たちが汽車で行ったり来たりしている間に、私は大ぜいの人たちの中でとくに目だっている人々の群に気がつきました。その人たちは山のぼりをする人たちでした。極東には世界に誇る山がたくさんあります。ですから、日本の人たちが山のぼりに熱心なのは誰にもすぐわかります。私が停車場でこれらの人たちをながめたとき、私はこれらの人について二つのことに気づきました。第一は、これらの人が山のぼりに必要な服装と装備とを充分にそなえていると思われることでした。第二は、これらの人の顔がその用心深いことをあらわし、これらの人の目が、その旅行について内心おさえきれない喜びと熱意とをもっていることをあらわしていることでした。

私は今すこしの間、あなたがたの生活を山のぼりとくらべてみたいと思います。私たちはみな「永遠の生命」という頂きへむかってのぼっているからであります。あなたがたのなかには、最近教会へお入りになって、まったく新しい生活に一歩ふみこんだ方が大ぜいいらっしゃいます。その道は容易な道ではありませんが、あなたがたの手に入るよい装備があります。あなたがたがしゅびよく山の頂きにまでのぼるためには、この装備をよく使うことをおぼえなくてはなりません。私は今ゼームス・ラムゼイ・ウルマンという人のことばを思い出しています。その人は、

「人間がマッターホルンやマッキンレイ山にのぼったということ自体はほとんど意味がない。人間がこれらの山にのぼりたいと決意をし、のぼるために努力をしたということが最もたいせつである。自分の手のとどかないところへのぼろうと努力している姿こそ真の人間の姿であり、弱さとおそれにうちかつことこそ真の征服であるというのが山に関する究極の知恵であるからである」と言いました

あなたがたの中には始めて扶助協会の仕事をなさる方が大ぜいあります。またはたぶんこれまで扶助協会に出席していても、扶助教会の働らきの精神をほんとうにつかんでいない、または扶助協会の目的と目標とがほんとうにわかっていない方々が大ぜいあるでしょう。たぶんあなたがたは、教会の仕事を何もかも一ぺんにしてしまうことはできないとお思いでしょう。しかし私は、あなたがたが扶助協会のために働らいて下さるようにはげまし、扶助協会はあの山の頂上へのぼりつくために大きな力となる道具であると申したいのであります。

主なる神さまは、神に仕える人々に大きな祝福を下さると約束なさいました。私は地方部といわず支部といわず、扶助協会のために

働いて下さる指導者の方々や役員の方々に感謝しております。教師の方、仕事の指導をする方、書記の役をする方、指導者の地位にある方は一人一人みな教会という組織のためになくてはならない方々であります。しかし、主なる神さまは教会の中でいろいろな地位をひきうける人々に、その地位をはずかしめないでますますよく働らくように期待していらっしゃいます。主なる神さまは、あなたがたが働らきによって「永遠の生命」に行くまで人生という山をのぼってゆくとき、正しい装備を身につけるように期待していらっしゃいます。

私たちは教会の宣教師のために、よく「教義と聖約」の第四章を引用します。そこには、

「この故に、汝ら神の役務に出で立たんとする者は、終りの日に臨みて神の前に咎なくして立たんため、すべからく心をつくし、勢力をつくし、思をつくし、体力をつくして神の役務をなせ」という御ことばがあります。

今私たちは、あなたがたが高くのぼる助けを得るために必要ないろいろな装備を見てみましょう。それらは、

信仰——神が真実ましますこと、神の目的、神のみことば等をかたく信じて信頼する。

知識——勉強、実地の経験、実地に役立つ熟練、いろいろな事実と事情によく通じていることなどによって知識を得る。

忍耐——不平を言わず平静を保って苦痛、試れんなどに耐えることのできる性質。

友情のあつい親切——同情あり、親切な、なさけのこもった、愛情のある性質。

けんそん——喜んで教えを受け入れる、神のみこころに従うこと。高慢の反対。

勤勉——不注意や怠慢でなく、一しょうけんめい働らく性質。

などであります。以上は、神さまが私たちに強くならせたいと思っておいでになります性質のうちから少しだけあげたのでありますが、これらの性質は、神の御国の働らきをいよいよ進める場合にたいそうたいせつなものであります。神さまは、あなたが神さまにおねがいをするとき必らず力をお与えになりますけれども、これらの性質を自分ひとりの力で強くするようにのぞんでいらっしゃいます。

また、あなたが山をのぼってゆくときに使うために忘れてはならないもう一つのたいせつな装備があります。それは正しい服装にくらべることができるかも知れません。それは教会にあるすべての召しと一しょに与えられる「とくべつな権能と祝福」のことであります。

私は人々が「いつ私はとくに任命をされるかしら」と言うのを耳にします。これらの人々はとくに任命をされてから、もしも主のみこころを行おうと努力をするなら、主がお喜びになるようにまた自分が満足をするように、その召しをなしとげるに必要な性質を主から授けられるにちがいないという信仰をもっています。そしてそのとおりになるにちがいありません。

あなたは、それぞれの支部または地方部で権能をもっている方からとくに任命を受ける権利があります。私はあなたがもうすでに任命を受けていらっしゃるなら、自分の受ける資格のある霊感にふさわしい生活をなさることを切におすすめいたします。もしまた任命

を受けていらっしゃらなかったら、何か一つ任務をもらいたいとおねがいになることをすすめます。また、自分を管理する権能のある人のところへ行って、自分の召しについて何をすべきであるかを知るためにいろいろお聞きになることもすすめます。もしも主のみこころに従うなら、主はできるだけのことをしてあなたを助けたいとお思いになります。主は、この世の弱い者をして賢い者をあわてまどわそうと仰せになりました。あなたにどのような召しが与えられようと、自分がそれに値しないと思ってもその機会を受け入れ権能のある人からとくに任命をされ、その職務をますます努める生活をするなら、あなた自身の義しさと知識はいよいよ増して、主のみ業を進めるために自分の役割を果していらっしゃるにちがいありません。あなたがけんそんな心をもってあなたの職務をますます努める生活をしていらっしゃるかぎり、主のみたまはいつもあなたに力を与えて下さるにちがいありません。

主の家は秩序の家であります。あなたは、あなたを管理する立場にある人々のために喜こんではたらき、喜こんで従わなくてはなりません。またあなたが管理する立場に立ったときには、あなたのために働らく人々をけんそんな心で指導しなくてはなりません。働らく人々よ、あなたがたの支部長会、あなたがたの扶助協会の会長会の指示に従って下さい。また支部の会員たちは地方部の役員たちの指示に従って動いて下さい。主は権能をもつ者としてお選びになった人々を認めておいでになります。

教会の姉妹たちが扶助教会というこの組織を与えられているのは、ほんとうにすぐれた祝福であります。この組織によって姉妹たちは神権者の指示を受けて隣り人に奉仕をしたり互いに助け合ったりすることができます。姉妹たちよ、落胆しないで今行っている仕事に喜びと熱心とをもっていることをあなたがたの目と顔にあらわして下さい。集りに出るようほかの人たちをたえずはげまし、「永遠の生命」の山にのぼることがどんなに満足な気もちを与えるかを知らせてあげて下さい。そして、あなたがたが一しょにのぼるとき、私は次の詩の一節をあなたがたにささげたいと思います。

「野をこえ岡をこえ
はるかかなたにそびえ立つ山を見た、
しづかに堂々とそびえ立つすばらしい山。
金色の光が
はるかかなたの山頂を照らすとき、
私は低い声が耳に入る。
高く、高くのぼってこい、
どろぬまのような下界から、
欲望という霧の中をぬけ出して
むなしい富の追求をやめ
みにくい自我をぬぎすてて
高く、高くのぼってこい」。

母親ルシイ・マック・ヌミスの語る

ジョセフ・スミスの生涯 (二)

第一章　ルシイ・マックの父ソロモン・マックとその自伝の一節

私の父ソロモン・マックは千七百三十五年九月二十六日にコネチカット州ニューロンドン郡ライムの町で生れました。祖父のエベネゼル・マックは多くの財産があってりっぱな暮らしをし、良い境遇の人々が受けるあらゆる尊敬と注目とを身に集めていて、その日常生活は道徳的に厳格な人でした。祖父は勤勉のけっか得たこのような生活をながい間充分に楽しむことができましたが、このようなことはいつまでも続きませんでした。やがてうちつづく不幸が私の祖父母をおそい、ついにそれまで幸福に栄えていた家族の人々たちが離散して、冷酷な世間の慈悲にすがらなければならぬほどの貧乏になってしまいました。

そこで私の父はとなりの農家にひきとられて二十二才になるまで過ごしましたが、そのころ軍隊に入りました。私は父の筆になる簡単な自叙伝をもっていますが、その中で父は自分がけいけんした幾多の会戦や軍隊にいるうちに出あった多くの冒険をこまかに誌しています。次はその中からの抜粋です。

「二十一才のとき私は主人のもとを去って、間もなく軍隊に入り、ヘンリー大尉の指揮する隊に属し、ホイッティング大佐のひきいる聯隊に併合された。

われわれの隊はコネチカットからニューヨーク州フォルトエドワードへ進み、千七百五十五年ハーフウェイ・ブルックの激戦に従事した。この遠征中に私はおもい感冒にかかり、あたたかい気候になるまで軍務に堪えなくなった。そして翌年の春アルバニーへ送られた。

千七百五十七年、私は将官用行李の運送につかう公用の牛の一組をもっていた。この仕事をしているうちに、ある朝この牛にくびきをかけようとしに行くと、一組の牛のうち三匹が見えなくなっていた。私の上官はこれを知るとひじょうに怒って剣をひきぬき、私の腹につき通してやると言った。それから、ほかの牛を三匹もってこいと私に命令をした。私は上官の命令通りにしてから行李を運んでフォルト・エドワードまで行き、翌日きのう居なくなった牛を見つけるためにもと所へ戻った。

私がこうして行き来している途中に次のようなことが起った。スチルウォーターからエドワードへ大体半分くらいの道のりをくると、私は約百五十メートルほど向うに四人のインディヤンが森の中から出てくるのを見つけた。このインディヤンたちは「頭の皮をはぐナイフ」とまさかりと鉄砲とをもっていた。このとき私はたった独りであったが、私の百メートルくらいうしろにウエブスターという名の男が一人居た。私は身の危険をさとり、策略を用いて逃げるのでなければ、とうてい逃げる道はないことを知った。そこで私はしばらくの間できるだけの大声をあげながら突進して行った。突貫！突貫！やっつけろ！と。私が身につけていたのは一本のステッキだけであったが、私はそれをふりあげて突進して行った。するとちょうどその時あの男が姿をあらわしたので、インディヤンたちは甚だしく恐れて一人のこらず逃げ去った。

そのあくる日、私は前に言ったスチルウォーターへいそいで行ったが、着くとまもなく私の牛どもを見つけたので、その夜すぐと出発して深い森の中の道を十キロちかくも突破してフォルト・エドワードへ戻ってきた。

千七百五十八年、私はスペンサー少将の軍に入り、ジョージ湖をボートでよこぎった一隊とともに西岸へわたって敵軍と激戦をまじえた。この戦闘のはじめにホウ卿が戦いに倒れたが、われわれは彼の内臓をとり出してこれを埋め、からだの方は防腐剤を塗って英国へ送った。

そのあくる日、わが軍は敵の胸壁にむかって突進したが不成功に終り、五百の死者と多数の負傷者とを生じたすえ退却のやむなきに至った。

この戦闘で私はまったく命びろいをした。一発の小銃弾が私の首から約一センチ半のところを下あごをかすめてとび去ったのであった。わが軍はそれからジョージ湖へ戻ったが、そこへ行く途中に、敵の強力な偵察隊がスキンスボローのちかくへやって来て、ハーフウェイ・ブルックで兵と曳車用牛の多数を殺した。ここにおいて、一千名のわが兵が戦況回復のため敵を追跡してただちにスキンスボローへ派遣されたが、サウスベイへついたときには敵は全く手のとどかない遠方へ去ってしまっていた。

それから敵は軍需品をとるためにニューヨーク州ティコンデラガへ進んで行ったが、その後ただちにわが軍をおいかけたので、わが車ははじめウッドクリークへ急行しつぎにフォルトアンへ方向を転じてうまく逃げることができた。フォルトアンへ到着したのはその

月の十三日であった。わが軍がフォルトアンへつくや歩哨が敵の包囲していることを知らせたので、その結果われわれは突然武器をとれという命を受けた。プットマン少将の隊が先頭に立ち、ロジャース少将の隊がしんがりをして一キロも進むか進まないうちに、まち伏せをしていた一隊のインディヤンとぶつかった。プットマン少将は兵の列を通して彼の部下をくり出したが、インディヤンたちはそれに向って銃火をあびせたのでわが方の兵はいくぶん混乱におちいり、プットマン少将はとらえられて、もしも、フランス人の一中尉に救助されなかったらインディヤンに殺されていたことであろう。

敵は雲の如くむらがり立って一せい射撃をして来た。私は最前列にいたので味方が後退することによってしんがりになってしまい、敵のなげるまさかりとうち出す弾丸は雨あられと私のまわりにふり注いだ。私が走っているとき、私はさほど遠くないところに風で倒れた一本の大木を見た。それはひじょうに高くてとてものりこえられそうもないと思われたが、私は必死の努力でそれをのりこえて走った。それから少し行くと、この戦いで重傷を負った男が居た。しかも、インディヤンは彼の身辺におそってきていた。このような状態であったにもかかわらず、私は彼を助ける目的でわき道へそれ、首尾よく彼をわが軍の中へつれてくることができた。

この会戦でゲルシャム・バウレイという男は九発の弾丸を受けたが、みな服を貫いただけでかすり傷さえ負わなかった。エンサイン・ウオシェスターは九箇所の傷を負い、頭の皮をはがれ、まさかりで切られたが、それでも死なずにとうとう助かった。

この戦いは朝早く始まって午後三時ごろまでつづいたが、その間にわが軍の半数は殺されたり負傷したり捕えられたりした。このようにおびただしい死傷者が出た結果、われわれは負傷者を後送する援助を得るためにフォルト・エドワードへ援軍を送ることをたのんだ。負傷者の総数は八十名にのぼっていた。

われわれが負傷者を送らなければならない道のりは約二十キロあまりであった。八十名の負傷者を二十キロむこうへ送ることはまったく体力を消耗させる仕事であったので、目的地へやっと着いたとき私はへとへとに疲れ切っていた。

私はそれから軍需品を得る目的ですぐにアルバニーへ向い、事情の許すかぎりできるだけ早くわが軍のところへ戻ってきた。

ところで今や秋になってしまったので、私は故郷へ帰り、そこで冬まで滞在をした。

千七百五十九年の春、わが軍はクラウンポイントまで進軍し、そこで私は除隊された。この年、私は学校教師をしていた教養のある若い婦人、リジャ・ゲーツと知り合いになった。彼女はコネチカット州イーストハッダムに住むナサン・ゲーツという金満家の娘であった。私は彼女と知り合ってから間もなく彼女と結婚することになった。

私は軍務に服していたために多額の金を受けたが、これは不動産に投資するのが慎重な態度であると考え、ニューヨーク州グランヴィルの町の土地を全部買いとる契約を結んだ。この売買契約を履行するに当って、私は契約に規定している金を全部支払ったが、この契約の中にはまた多数の丸太の家を建てることも入っていた。私はこの契約に従って丸太の家を建てる仕事を始めたが、しばし働いているうちに、不運にも私は足を切ってその季節の間医者の治療を受ける身になってしまった。そこで私はその仕事をする男を一人や

とって前金をわたし、契約の履行をしようとしたが、その男は仕事をせずに前金を持って姿をくらました。この結果、私は金も土地も全部失ってしまったのであった。

千七百六十一年、私たちはマルロウの町へ移り、四人の子供ができるまでそこに留まっていた。私たちがマルロウの町に移ったとき、それはほんとに荒涼たる荒野であって、五十キロ四方にたった四つの家族が住んでいただけであった。このような所に住まねばならぬ境遇になって、私は始めて自分の妻のもっていた才能と美徳に対して感謝をしたのであった。というのは、私の子供たちが学校へ行けなかったので、妻が子供の教育を一身にひき受けて、誰にもできないくらい有能な教師として義務を果してくれたからであった。いろいろな教えは彼女の模範と共に、子供たちの心に強い印象を与えて決して忘れられないように計画してあった。

私の妻は、子供たちにいろいろな普通教育を授けた上、朝晩にきまって子供たちを呼びよせて祈ることを教える習わしであった。またその間にお互いに対して愛をもたねばならぬことをすすめ、また創り主である神を敬まわねばならぬこともすすめたのであった。このようにして、私の一番始めの子は敬けん、親切、反省などの美しい性質をしっかり身につけるようになったので、そのあとに生れてきた子供たちをこれと同じ幸福な道に導びくのに大そう役にたった。もし私の子供たちが、その母のすぐれた性質を大部分もらっていなかったら、教育を授けることはずっとむつかしい仕事になっていたことであろう。

千七百七十六年、私はアメリカ国の軍隊に入りかなり長い間にわたって陸軍に居たが、その後二人の息子と一しょにヘヴンス船長の率いる私掠船（敵の艦船を捕獲する免許を得た民間の武装船）に乗って遠征に出かけた。ところが出帆して間もなくホースネックに吹きあげられてしまった。しかし、何とかして数門の大砲を陸上げしこれを敵の方へむけて大いに打ち合いをやったが、敵はわが船の帆づなを切ってしまったので船はこわれるに任された。

それでわれわれは転進していかりを入れたが、間もなく前方にガレー船が二隻、スループ型の帆船が二隻、スクーナー船が二隻、合計六隻がこちらへやってくるのを見つけた。そこで急いでいかりを上げ、またもや岸の方へ転進してやっとのことで四門の大砲を使えるようにすえつけたが、時を移さず血なまぐさい戦いがはじまった。敵がうち出す砲丸はいたるところに土けむりをあげ若木の枝をひきさいた。敵のガレー船一隻はわが軍を囲もうと思って岬をまわったが、われわれは小銃をもって敵四十人を殺したので彼らは目的をすてて退却した。

その間に、私の息子のスティーヴンは、船室つきのボーイたちと一しょに一人の傷兵を伴なって岸からほど近い一軒の家へ派遣された。彼らの一行がちょうどその家へ入ったとき、十八ポンド砲が一門彼らの後からやってきた。その時一人の婦人が家の中で揚げ菓子をつくっていたが、何となく胸さわぎがするので地下室へ入ることにきめた。そして入りぎわに若い連中にむかって、私は地下室へ入るからそのお菓子は食べてもいいよと言って立ち去った。

若い連中はこれを聞いて大いによろこび、菓子をつくっては食いつくっては食っていると、敵の大砲はごう然ととどろきわたり、たちまち四方は死山血河のちまたと化した。この若い連中の先頭に立って戦ったのは私の次男のスティーヴン・マックで、彼は十五才の

若冠ながら大胆不敵たのもしいかぎりであった。

この戦いで敵は数においてはるかにわが方にまさっていたが、わが方は一歩もゆずらず勇敢に戦ったので敵の勢いをくじき、敵はついに姿を消したのであった。われわれも間もなく出帆しニューロンドンへ針路をむけた。

戦いがやんで世の中が再び平静になったので、私たちはリヴァプール行きの運送船を一隻やとった。そしてリヴァプールで船と貨物とを売り払い、フォスター船長の船に乗った。私たちは後にこの船を買うことになったが、何度もあらしに逢って難破した結果、船を手離さざるをえなくなり、私は完全におちぶれてしまった。

私はその後もう少しの間、金をつくるために冒険をあえてしたが、結局四年にわたって留守にしたわが家へ帰ってきた、ほとんど無一文で。

それからというものは、もうけっして空想を追わずに、神さまと家族に奉仕をして余生を送ろうと決心したのであった」。

以上で、私が抜粋をした目的も達せられたと思いますから、父の自叙伝はこのへんで止め、次は父の子どもたちのことを話しましょう。

第二章　ジェソン・マックの生涯

私の長兄ジェソン・マックは勤勉で男らしい人でした。彼は満十六才にならないうちに当時シーカー（求正教徒）といわれていた教徒の一人となりました。そして、昔キリストの弟子たちに与えられていた福音の賜物は、信仰と祈りによって今も与えられると確く信じて、ほかの人々にも同じ信仰をもたせて改宗させようとほとんど不眠不休ではたらきました。またその上に、神さまはいつか将来しるしと不思議とをあらわして、昔なさったように神の御力をお現わしになると信じていました。

そして二十才のとき福音を説く伝道者になりましたが、その後間もなくある金満家の若い娘さんと知り合いになりました（この娘さんの名はエステル・ブルースと言い、ニューハムプシャーの出でありました）。

この娘さんはその町の誇りであって、姿かたちがすぐれているというよりも、むしろそのしっかりした精神と品のある態度とが、飾りけのないおだやかな気だてとけんそんなふるまいとに加わって、私の長兄の趣味と主義とにぴったり合ったのでした。ジェソンは彼女を深く愛するようになりましたので彼の心は完全に彼女の心となり、彼女と結婚せずに生きて居れようとは彼にとってまったく考えられないことでありました。

私が考えますのに、二人とも同じ思いでありましたので二人は婚約をすることになりました。ところで、二人が婚礼の式のとりきめをしようとしていたとき一通の手紙がリヴァプールから父のところへとどいて、多額の金が集金されて今父におわたしするのを待っているということを知らせてきました。

このような知らせがきたので、父は長男のジェソンをつれてリヴァプールへ行きたいと思い、二人の婚礼は用事がすんで帰ってからにすることに一致しました。そういうことになりましたので、兄は重い心を抱きながら、自分の留守の間は少くとも三ケ月に一度は彼女と自分の妹のところへきっと一しょに手紙を出すと約束をして、婚約をした未来の花よめをのこして旅立ったのであります。

それから三ケ月のうちに、約束どおり一通の手紙が彼からとどいて受とる者の心をほんとうに喜ばせましたが、どうしたものかそれっきり梨のつぶてになってしまいました。

長兄の婚約者であるその娘さんが手紙を受けとった郵便局を経営していたのは一人の青年でしたが、この青年はもしもできるなら私の長兄のじゃまをしてこの婚約を破れさせ、その娘さんを自分の手に入れようとひそかに決意をしたのです。彼はこの結婚が不得策なことを口をきわめて彼女に説得をしはじめたのですが、それが効を奏さないと見るや、私の兄から来る手紙をかくしてわたさず、彼女のことなどかまいつけないと兄のことを悪く言いました。それでも不成功であることを知ると、今度はジェソンの友だちから送ってきたというにせの手紙をつくって、その中にジェソン・マックは死んでしまった、ジェソンの友だちは二度と会うことができないであろうと書いたのです。

それからこの男は彼女にむかってしきりに結婚をしてくれとかきくどいたのでありますが、彼女はそれを受けつけず、ジェソンが帰ると言ったときから四ケ月たたないうちは拒みつずけていました。それなのに、彼女はとうとう自分に、あの青年を誤解していた、あの青年は自分が考えていたよりも実は立派な人だったときめたのです。そして、私の兄は帰ると言っていた期限がきれても帰ってきませんでしたから、彼女は私の兄が死んだというしらせは本当であったと信じて、あの青年の申出を受け入れ結婚をしてしまいました。

兄は実際に帰ってきました。帰ってくるとすぐに彼女の父の家へ行きました。行ってみると彼女は兄弟の葬式の会場へ行って留守でした。兄は家へ入って、かって彼女にむかって何度も求婚をしたことのある部屋に腰をおろしました。まもなく彼女は帰ってきました。はじめ兄の顔をちらりと見たとき、彼女は誰であるかわかりませんでしたが、まともにむかいあってそれが誰であるかはっきりとわかったとき彼女は気を失って倒れてしまいました。その時以来、彼女は二度と健康を回復しませんでした。二年ほど病床にしたしんだあげく、あの大きな心の打撃のために亡くなりました。

ジェソンはしばらくの間、近くに住んでいましたがそれから海員になりました。しかし長くは海員生活をつずけず、まもなく海をはなれてまた福音を説きはじめました。そして死ぬまで兄は福音を説きつずけました。（扶助協会レッスン「文学」、十一月十二月用）

扶助協会レッスン

「神学」—教義と聖約

（千九百六十二年十二月第一週）

第四十三課　世の働らきを休んで礼拝をする日

テキスト「教義と聖約」五十九〇一—十四

目的　—世の働らきを休むことと、安息日について主なる神の仰せになったことを学ぶ。

「はしがき」

千八百三十一年八月七日（日曜日）に、予言者ジョセフ・スミスは、彼に物質上の援助を与えたことのあるジョセフ・ナイトの妻ポリィ・ナイトの葬儀に参列しました（教義と聖約十二章、二十三〇六参照）。この二人の息子であったニューエル・K・ナイトは、母はひじょうに病が重かったにもかかわらずミズーリのカートランドへ行くと言ってきかなかったと書いています。シオンの地の上に立つという彼女の最大ののぞみは許されました。このポリイ・ナイトについて、予言者も、彼女はシオンの地において死ぬ最初の会員であり、「復活の日までイエスにありて眠る忠実なる会員」であると書いています（教会記録歴史第一巻百九十九頁の脚註）。八月の七日までにシオンの地は聖徒が集合するはずの地として聖別され、神殿の敷地が献納され、またシオンにおける最初の大会が開かれました。これは第五回目の総大会でありました。そして、コーレスヴィル支部の会員たちがこの大会に出席しました。

「彼らはその働らきより休むべし」

主なる神さまは、もし神の栄光をまごころから仰ぎ見てシオンの地に上ってくる者たちがあるならば、その者たちにめぐみを与えようと約束をなさいました。教義と聖約第五十九章一節にあるように、「誠心を以てわが栄光を仰ぎ見る」ためには神の誡命を守らなくてはなりません。この考えは次の聖句の中にある考えと一貫しています。すなわち「そは生くる者は地をつぐことを得、死ぬる者は全く働らきを休みて安息を得。されど彼らの為したる業はその人々につき従いて、わが備えたる父の住居に於て冠を受けしむればなり」（教義と聖約五十九〇二）。

人はこの聖句を喜びの情をもってよくよく考えるがよろしい。そうすれば人々がこの世の生活で神の計画にしたがうならば、復活をするに当ってその義しいはたらきのために良い酬いを受けるにちがいないことを悟るでしょう。義しい人々は、復活という最後の光栄を受けるための進歩をする霊界にしばらく留っていたのち、父なる神の住みたもうところに一つの住居を与えられます。すなわち「誠心を以て神に仕えた」人々に与えられる「日の栄の世界」に一つの住居を得るのです（教義と聖約八十八〇二十—二十二、六十六—六十八参照）。

「啓示はめぐみである」

福音の教えを実行する人々には「地の良いもの」が約束されています。これは前にシオンに関する第四十一課で考えたことであります（千九百六十二年八月号参照）。聖徒たちはこのような「物質上のめぐみ」を受ける上に神の誡命や啓示のことばも受けます。

「またわが前に忠実にして勤勉なる者は、天より祝福をもて冠を受くべく、また誠に少なからざる誡命とその時々に関する啓示とを与えらるるなり」（教義と聖約五十九〇四参照）。

人が神の誡命をすべて守るなら、その霊の幸福がいちじるしく高められるということは事実であります。世の中には、神の誡命は人を拘束するものであると信じて、福音が人を束縛から解放するものであることをほとんど悟っていない人々があり、しかもその数は大きいのであります（ヨハネ伝八〇三十一—三十二参照、教義と聖約八十四〇四十九—五十三参照）。真の自由とは、神と人間とに対してけがれのない良心をもっているということであります。

神の誡命は啓示によって与えられます。そして、啓示はまた忠実な人々にのぞみと平和とおわりまでつづける勇気とを与えます。

「大いなる誡命」

自分の誡命の一つは別の誡命よりも偉大であると言えるのは「父なる神」だけであります。父なる

神は御子を通じて、人は神を愛せよ、これは第一の誡命である。自分のように隣人を愛せよ、これは第二の誡命であると言って、前のことを事実上言いあらわしになりました（マタイ伝二十二章三十七〇四十参照）。このレッスンの主体である啓示にあらわれている、上記二つの大いなる誡命に関するたいせつな知識に注目して下さい。

「この故に、われ彼らに一つの誡命を与う。曰く、汝心を尽し、勢力と思いと体力とを尽して汝の神を愛すべし。またイエス・キリストの名によりて神に仕うべし。汝己れの如く汝の隣りを愛せよ。汝盗むなかれ。また姦淫を犯すなかれ。また、人を殺すなかれ。また何事にてもこれに類することを為すことなかれ」（教義と聖約五十九〇五―六）。

この啓示の中でとくにある誡命について言ってありますが、その誡命を破るならば、それは明らかに隣り人を愛さないことであります。また以上の律法は盗むこと、姦淫をすること、殺すこと、そのほか何でもこれに類することが罪であるとしています。第二の大きな誡命に関係しているこれらの律法がたいせつであることは、「もしも人がこれらの道徳律を破っても隣り人を愛していると言えるだろうか」と質問さえすればそれでよくわかることであります（千九百六十年八月九月号所載、第二十六課と第二十七課を参照のこと。）

「感謝とけんそんの心」

あらゆることに対し、主なる神さまに感謝をあらわさなくてはなりません。聖徒たちは何に対して感謝するはずでありますか。それは自分自身をためすいろいろな機会のある人生ですか。人生にはっきりした目的を与える完全な福音ですか。今日、神の予言者たちが神から指示を受けていることですか。大きなめぐみが忠実な人々に与えられるということを知って喜ぶことですか。以上はもちろん、そのほか数知れぬほど多くのめぐみに対し、祈りの中で父なる神さまに感謝を述べるはずであります。しかし、これだけが有難いという心持ちをあらわすただ一つの方法ではありません。人が神の誡命を実際におこなっている時、その人は祈ると同時にまた父なる神と御子とを愛しています（ヨハネ伝十四〇十五、教義と聖約四十六〇七参照）。感謝のこころとけんそんな念をもって祈りをささげるなら、人はいつまでも信仰を失なわないでありましょう。

けんそんな念をもつことは、たやすく教えを受け入れ、主なる神さまのみこころを完全に受け入れるという性質のあることです。けんそんな人、すなわちくだけた心と悔改めの精神をもっている人はすべてのことに対して感謝をあらわし、その結果栄光を与えられるにちがいありません（教義と聖約七十八〇十九参照）。

「安息日の誡命」

以上述べたすべての真理（第五十九章にある）は、次にある安息日の誡命をよく理解させるための準備でありました。

「汝なおさら充分に世の汚れに染まざるよう、祈りの家に行きてわが聖日に汝の聖式を捧ぐべし。そは誠にこの聖日は、汝命ぜられて働きを休み、いと高き者に礼拝を捧ぐべき日なればなり。

さりながら、汝の誓言は正しく毎日常に神に捧げられざるべからず。

されどこの主の聖日に於ては、いと高き者に汝の捧物と聖式とを奉りて、兄弟たちに向い主の前に於て汝の罪を告白するを忘るべからず。

而して汝この日には他に何事をも為すことなかれ。ただ汝の断食を完からしめんため、言いかうれば汝悦びを以て充されんため、真心をこめてその食物を支度することのみをなすべし。

誠にこれは断食と祈りにして、言をかえて言えば悦びと祈りなり。

而して汝ら感謝と愉快なる心と顔容とを以てこれを為さば――多く笑いてこれを為すなかれ、そは罪悪なればなり、されば悦ばしき心と愉快なる顔容を以てなせ」（教義と聖約五十九〇九―十四）。

安息日になせと言われているこれらの誡命は次のように言うことができるでしょう。

(一)「汝祈りの家に行きて……」。何のために祈りの家へ行くのですか。「なおさら充分に世の汚れに染まぬように」行くのであります。人々は堕落するのに最もよい機会があると真理から脱落してしまうことがあります。しかし、定められた集会に出るため教会へ規則正しく出席する人は、信仰と学問と光栄と秩序と、真に神の家とを見出すにちがいありません（教義と聖約八十八〇百十九参照）。

神の家では聖餐式のときとおなじように、聖式に集る人々は友だちと一堂に相会してはげましを得るのであります。

会員の中には、毎週毎週おなじ話を聞くばかりであるとかそのほかの理由から聖餐会に出ない人があります。この考えについてヒーバー・J・グラント大管長は次のように言われました。

「会員の中には集会に出ない人々があるが、その理由とするところは、出たところで誰が話をするか、また何を話すかわかりきっているからであるということである。私には、これらの人々が神の教会にある義しい教えに無関心になりつつあることがはっきりとわかっている。私は、昔遠い道をはるばる教会へかよって来た人々を知っている。この人々が当時福音を心から愛していたからである。彼らはいま通りを横ぎろうとはしない。もはやその愛を失なってしまったからである。食事をしなければやせ衰えて死んでしまうと同様に、霊の食べものを与えなければ、その人の霊性は死んでしまうにちがいない。」

㈡「わが聖日に汝の聖式を捧ぐべし」。これはどういう意味でしょうか。この聖式とは聖餐式のことであります。聖餐式とは、とくに会員が主なる神と聖約を結ぶ式であります。末日聖徒にとって、聖餐式は聖約を結んで聖約を「あらたにする」機会であります。

立派に資格をそなえて聖餐をいただくとき、その会員は「みたま」が共にましますというめぐみを約束されるのであります。真の礼拝の精神をもって聖餐会に出席する本当の理由はここにあるのであります。

㈢「誠にこの聖日は汝命ぜられて働きを休み……」。第五十九章十節をみると、この言葉を守ることが安息日の礼拝に欠くことのできない大切なことであると言ってあります。「働きを休み」とはどういうことでしょうか。たしかにそれは「なまける」ことではありません。しかし、何の働らきを休むのでしょうか。ジョン・A・ウイツソウ長老は、真の休みとは人がその職業もしくは毎日の仕事の環境を変えることである。しかしながら、人は安息日に為さねばならぬことに力を尽さねばならないと言われました。

しかしながら、安息日にもある人々が従事しなければならない仕事があるでしょうか。農場の家畜に餌を与えたり世話をしたりすること、交通電燈病院警察消防そのほか安息日にも従事しなくてはならない仕事があります。しかし、全体から見て日曜日に働らく人は自分が不活潑な会員であることを知るでありましょう。

㈣「いと高き者に礼拝を捧ぐべき日なり。」礼拝、礼式いずれも聖餐式とおなじ意味に使ってあります。安息日における集会の「礼拝」とは何であるか。この問題については次のことばから教えられるでしょう。

「安息日に聖徒たちは祈りの家に行って彼らの聖式を捧げなくてはならない。すなわち聖徒たちは主なる神に礼拝を行わなくてはならない。その礼拝とは讃美歌、祈り、感謝、証詞をささげ、聖餐をいただき、知恵の言葉について静かに深く考えることである。以上を総括して「聖餐会」というが、最も広い意味から言えば、主なる神に忠誠を誓う神聖な式、礼式は「聖餐会」ということになる」（「教義と聖約」の註解「英文」三五一頁参照）。

ジョセフ・F・スミス大管長は聖餐式について「人々が日曜の朝早く馬車、自動車などに妻子をのせて、観光地へ友人の訪問へとどさくさ出かけて行くのは自己の宗教上の信仰や義務に熱意をもっていない証拠である。このような人々はこうしていと高き神に礼拝を捧げているとは言えない」と言っておられます。

㈤「いと高き者に汝の捧物と聖式とを奉り」。物質的の捧物はもちろん霊の捧物も主なる神に奉るはずであります。昔も今も「捧物」と言えば何のことであるか、それについてよくわかる説明が「教義と聖約の註解」「英文」三五二頁にしてあります。

（註）モーセの神権時代に於ては、罪のあがない、恩恵に対する感謝のしるしなどとして神に捧げられたるものを総称して捧物と言った。家畜の初子、初なりの果実、什分の一、香料、供物のパン、これらはみな捧物であった。以上のうち或るものは律法で定めてあり、或るものはまったく自発的であった。「新しき永遠の誓約」の中で主なる神は什分の一と捧物、寄附と贈り物とをめぐみ深くも嘉納なさっている。されば、主の日すなわち安息日は、必要ならば兄弟たちのことであるがひそか

に主の前で罪を告白するのはもちろん、以上の捧物をすることを忘れずに行なうためにひじょうに適当している日である」。

(7)「兄弟たちに向い主の前に於て汝の罪を告白するを忘るべからず」。教会の総大会でマリオン・G・ロムネイ長老の述べた次のことばは一つの説明になることでしょう。

「私たちはすべての罪を主の前で告白すべきであると、私は考えたい。全く個人的であって自分と主以外に影響のない背罪に対しては、このような告白で充分であろう。他人を怒らせるようなあやまちに対しては、その怒らせた人に対しても罪の告白を行い許しを求めるべきである。

最後に、ある人が背罪をして、悔改めをしないとき、その背罪がその人の、イエス・キリストの教会内における正会員たる資格を危うくするような性格であるときには、私の考えでは、その人は悔改めをして監督（支部長）またはそのほかの正しい管理役員に全部告白をする必要がある。これは教会の役員がその人の罪を許すことができるというのではなくて（これは主なる神御自身と、とくにその権能を委任された人だけができることである）、むしろ正当に任命された役員を通じて行なう教会が、完全に真相を承知の上で、その時の状態に適する教会の宗規に応ずるような処置をとることができるためである。

自分の罪をすて、正しい告白をし、主なる神の前と、かつて怒らせたことのある人々の前と、イエス・キリストの教会の前に自分の行いを清く正しくするならば、その人は確信をもって主の赦しを求めて、キリストの贖いによりたのみつつ新しい生活に進み行くことができるであろう」（千九百五十五年十月大会報告一二五頁参照）。

(8)「真心をこめてその食物を支度することのみを為すべし」。この教えの意図は日曜日をごちそう日にしないというところにあると思われます。この点については次のように言われています。

「安息日に当っては食物さえもまごころをこめて支度しなければならない。すなわちただ誠意をもって簡素な食事の支度をすることである。安息日に於けるわれわれの心は、われわれの望みは念入りなごちそうの上にあってはならない。このようなごちそうによって安息日を守らない人もでてくる。安息日の食事は簡素な一度の食事で充分である。その程度に、毎安息日は悦びをもって満される。断食日であるべきである」（教義と聖約の註解」「英文」三五二頁参照）。

(9)「而して汝この日には他に何事をも為すなかれ」。この戒めは、これまで述べたように、安息日に守るべきことを積極的に要求したことによって、何をしなくてはならないかという勧告が充分に尽されたのをはっきりさせていると思われます。またこの啓示を注意して読む人々は、主がその時に、この律法を守らない場合についていろいろ挙げて言っておいでにならないことをはっきりと知ります。しかしながら、やがて世の人々は安息日の律法に従わず日曜を聖日にしないで休日とし、安息日に公開されている娯楽場へ自動車をとばすようになって、教会の会員もこの誘惑におち入りはじめました。これによって、わが教会の大管長会は安息日を守ることについて公式の「ステートメント」を出しました。千九百五十九年六月十九日に大管長会のデビド・O・マッケイ、ジェー・リューベン・クラーク・ジュニヤ、ヘンリー・D・モイル等管長が出された最近の「ステートメント」には、昔主がお与えになった誡命と教義と聖約第五十九章でお与えになった誡命とが強調してあります。それには教義と聖約にのっている啓示と出エジプト記二十〇八―十一を引用した後、次のように言ってあります。

「末日聖徒たる者は、安息日に関する以上の誡命を忘却することがあってはならない。この「最後の神権時代」中に、主の予言者たちは常に安息日を守るべきことを主の民に力説してきた。主として世人の快楽に関し、時にはレクリエーションの名にかくれ、時には主が罪ありと言われた所業により、安息日を守らなくともよいといういろいろな考えが不信者により、生ぬるい信者により、また考えのない人々によって力説されてきた。

安息日は、われわれが単に仕事を休んだり、軽率な気持ちで自由に使う日とは全くちがう日である。安息日は聖日であり、主の日であって、敬けんな気持ちで礼拝をなすべき日である。これに関係のないあらゆることは遠ざけるべきである。われわれは次の原則を

すべて心に銘じなくてはならない。われわれはとくに、安息日の律法を破る行いをするために多くの小神権者から要求されることがある行いを忘れないようにしなくてはならない。このようなものの中には、神権者が義務を行うに当って、また定員会の集りに出席する時のさまたげとなるものがある。全教会員の宗教上の義務と諸活動に有害に働らくこれらのことのために、またその他多くの理由があるために、福音が真理であるというあかしを持ち、安息日を守ることから来る霊の祝福があるということを知っている末日聖徒は、安息日を買物の日にしたり、主の聖日を正しく守るためにふさわしくない行為をする日にしたりすることはない。安息日には健康、力、体を休めていること、および主の豊かな御手から与えられる霊の喜びなどの祝福に対し心から感謝の気持ちをもてと命ぜられている（デゼレトニュース千九百五十九年六月二十日）。

「両親の模範」

主なる神は、安息日を人が霊のためになることをする聖い日としてお定めになりました。イスラエルの予言者であったモーセに、安息日は主とイスラエルとの間のしるしであると言われました（出エジプト記三十一〇十三—十四、エゼキエル書二十〇十九—二十四参照）。

安息日を聖く守れという勧告は、それが与えられた昔と同様今も守らなくてはなりません。（教義と聖約五十九〇十二参照）。今日安息日を聖く守ることの結果は、昔約束されたと同じであります。

世の人々は今日どのようにして主の民を知るでしょうか。その一つの方法は彼らが休みの日を聖く守るということです。安息日の律法を守る人々は真理を知ってあかしをします。福音の証言は個人個人の信仰にもとずいていなくてはなりません。両親たるものは一人のこらず「安息日を聖く守るという私の態度は、私の子供たちの信仰に反映したか」とたずねる必要があります。言葉をかえて言うと、もしも両親が安息日の律法を破るなら、その子供たちは自分たちも主の誡命を無視してよいと思うだろうか、ということです。安息日を守るということは子供の生活に信仰という果実を生じさせ、またそのほかの誡命を守ることによって真理のあかしもできるのであります。

考察のための質問

(一)主の誡命はすべて祝福であることを論じなさい。

(二)このレッスンの前の方にある誡命（安息日の誡命でない）をいくつか挙げなさい。なぜ大切であるか話して下さい。

(三)末日聖徒が感謝しなくてはならない祝福を挙げて数えなさい。

(四)安息日を守る律法の中にある、私たちの守らなくてはならない誡しめを八つだけ言いなさい。

(五)(イ)聖式を捧げる(ロ)働らきを休む(ハ)いと高き者に礼拝をささげるとはどういうことですか。

(六)両親が安息日を聖く守れば子供たちの生活に良い影響を及ぼす、ということを論ぜよ。

訪問教師のメッセージ

（千九百六十二年十二月第一週）

「教義と聖約」にもとずいて実践する真理

メッセージ第四十三「心安かれ」

（教義と聖約六十一〇三十六）

目的—快活であることは福音の教えの中でも大切な要素であることを指摘する。主は人々が快活であることを欲したもう。

ユダヤの家庭で話されているある昔話の中に、ある賢人が混雑している市場の中で予言者のエリヤに逢ったという話があります。そのとき賢人は、神さまがとくべつの祝福をおさずけになるとき、神さまはどのような性格を人間の中におさがしになりますかと予言者に聞きました。そして、物を売ったり買ったりとりかえしている人々がこみあっている四つじの広場をみわたしながら、これらの中で神の祝福にあずかる者がいるかどうかをたずねました。すると予言者は「これらの者のほかには一人もない」とこたえて少数の人々を指さしました。その人々は明らかに此世の物には事欠いているけれどもその顔には快活な心と親切な思いとが目に見えてかがやいていました。その賢人は、なぜこれらの人々が神のめぐみを受けるように選びだされたかそのわけを知りたいと思って、その人々のもっているよい性質と行いとについてたずねました。するとその人々のうちの重だった者が「わたしたちは貧乏だけれども、わたしたちの良いところはおもに陽気な心をもっていることだ。わたしたちはがっか

りしている連中になぐさめと希望とを与えてやろうとしている。悲しんでいる人に会うときにはその悲しみを追いはらって、光明と善意とをその生活に入れてやろうとしているのだ」とこたえました。

私たちが福音の欠くべからざる要素を考えるとき、愛信仰希望慈善などという特別の性質がすぐと心に浮びます。しかし、私たちの中で「救い主」の教えと快活の徳とをすぐに結びつける人はおそらく少いでしょう。それでも「救い主」はこの性質をたびたび強調なさいました。たとえば、主イエスの弟子たちが湖の上を舟で走っているときあらしが起って弟子たちが水に呑まれようとしたとき、イエスは水の上をわたって弟子たちに近づき彼らを呼んで「心安かれ、われなり、おそるな」とお言いになりました（マタイ伝十四〇二十七）。また「救い主」はたびたび病人をお癒しになりましたが、そのとき「心安かれ」と言っておいでになります（マタイ伝九〇二参照）。パウロは奇蹟的に改宗してから、エルサレムに入って人々に教えをのべ伝えていました。そのとき人々が大きなさわぎを起してパウロは殺されそうになりました。するとその夜主イエスはパウロのかたわらに立って「雄々しかれパウロ」（使徒行伝二十三〇十一）とお言いになりました。

快活な心をもつということには、勇気を出すこと、楽観をすること、確信をもつこと、安楽な落ついている心をもつことなどの意味があります。ある考え深い著者は「快活な心は確信と熱情とを放射する。それは心配、おそれ、落胆とまったく反対のものである。快活な心は機敏な精神、心のおちつきを生じ、多くのものに同情すを心を起させる。快活な心をもてば満足と平静とを生ずる」と言いました。

快活な心をもつということは、いんうつと暗い影とをくよくよ思うことでなくて、喜びと光明とを生活に入れるように努めることであります。快活であるということは、私たちがまじわる人々を喜ばせ、なぐさめ、元気をつけてやるということであります。また快活とは人に対して親切で、礼儀正しく、優しく、上品で、誠実であるということです。

私たちの宗教は「快活な宗教」であります。福音は私たちに楽しくかつ安心していよと教えています。予言者ニーファイは「人類が現世にあるのは幸福を得んためである」と言ってこのことを強調しました（ニーファイ第二〇二十五）。福音の中にあるすべての原則は、人間の生活に平安と確信と幸福をもたらすことがその目的であります。

快活であることは必ずしも容易ではありませんが、自分は快活であると心に考えると快活になることはわかりきったことであります。ある人が「他人の生活に光明をもたらす人々は、自分の生活から光明を遠ざけることができない」と言ったのはまことに適切なことばであります。

ソロモンのことばに「こころに楽しみあれば顔色よろこばし」（しん言十五〇十三）というのがあります。そこで、快活とは最も人の心に訴える自然の美容剤であると言えるでしょう。心が快活であればすばらしいかがやきが顔に出てきます。

それでありますから、「心安かれ……われ汝らの唯中にあり。而して、われ汝らをすてしことなければなり」という主のなぐさめの御ことばをいつも私たちは忘れないようにしましょう（教義と聖約六十一〇三十六参照）。

「仕事会」

（千九百六十二年十二月の第二週）

「末日聖徒の家庭」

考察その三「末日聖徒の家庭はよく組織されている」㈢

目的—自分の時間を組織立てる価値を理解する助けを与えること。

一番始めに使う所へその品物を置き、家の中でいちいちさがしにもどる必要のないように、洗剤のように台所でも洗濯場でも使えるものは各々その場所へ置く、このようにすればあなたの家庭を便利にするという目的を達したのです。そのときあなたには、あなたの時間を組織立てるという新しい目標にとりかかる用意ができたのであります。あなたは一日、一週、一月、もしくは一年の予定という立場から時間をながめ始めなければなりません。世の中には、毎日の生活を五年もしくは十年という長期計画の下に整理して、長いさきの目標に達するように一日一日を送っている人々があります。ある有名な教育者はこの考え

を実行して三十才になる前にマスターの学位をとり、四十才になる前にドクターの学位をとり、五十才になる前に息子には十分の教育を受けさせ、宣教師の働きもさせるときめました。そして百才になる前に成就する目標を各十年ごとにもっています。長い人生のうちにはいろいろのじゃまも入り、少々目標を変える必要も生じましたが、大きな目標はすでに達成されています。毎日毎日の時間表がもしも完全に達成されるなら、人は物事を完成した結果として得られる満足を感ずることができます。

大きなカレンダーの一日一日に書入れをすることができるなら、時間計画を実行するのに大そう役立つでありましょう。いまカレンダーの三百六十五日を見わたして、各人の誕生日にとくべつのしるしをつけます。またとくにお祝いをする日、家族にとって記念すべきでき事のあった日にもしるしをつけます。

次に色鉛筆で、とくべつなでき事、もしくはしなくてはならない或る種の仕事の準備に要する時間をとり去ります。このようにして一年間を見わたすことができるようにすると、毎日のまたは毎週の予定に荷をかけすぎないようにあなたの仕事に間隔をおくことができるでしょう。

さて、あなたのもっている一週間の予定表を見て下さい（この時方法を示すために黒板をつかいます）。ある一日のところに「扶助協会」と書きます。教会主催のいろいろな出来事を各々の正しい場所へ予定します。また一週の中の重な出来事である「家族の夕べ」のある日には星のしるしをつけます。あなたとあなたの家族にとってたいせつな事項が全部予定されたのち、こんどはこれらのしなければならぬことがある日の間に、自分の仕事をどのようにしてしようかと考える番です。

誰にでも通用するように毎日の仕事を組織計画することは不可能です。大事なことはあなた自身が自分の仕事を組織し、あなた自身が計画をし、あなた自身が朝早く起きて一日の仕事の用意をすることです。これは働らくための衣服をつけて働らけということで、長そでの着物や寝室用のスリッパーをはいているということではありません。注意して組織計画をする人は、目的もなしにまる一日動きまわってようやく仕事を終る人にくらべて、三時間のうちにそれ以上のことを完成することができます。

科学的に計画を立てるには、何をするか、誰がするか、どのように実行するかの三つを知らなくてはなりません。あなたの一日の働らきには次のような仕事が含まれているかも知れません。それは食事をととのえ、軽食の準備をし、寝る場所をととのえ、部屋を掃除し、通り道をはき清め、動物にえさをやり、針仕事をし、歯医者へ行くことなどです。いろいろな仕事を表にして見さえすれば、誰がどの仕事をやるべきかを計画する役に立つにちがいありません。

家政は協力的のくわだてであります。それですから、家族の一人一人が利益の面ばかりでなく全体の責任もわけ合わなくてはなりません。一人一人が興味を失なわないように、仕事を交代して受けもつことは一つの有用な実行計画です。また仕事をするやり方を教えるのは「家庭の支配人」である主婦の仕事であり、終った仕事をやりなおしをさせないで受け入れることは必要なことです。また前よりもよくするために仕事のあとさきを検査して教えることは「事後検討」の一部分であります。

まだ幼い子供には、ぬいだ着物を片つけることを教えることができます。そうすればあとから寝床の用意をする機会をよろこんで迎えるようになるでしょう。仕事をしたらほめて奨励をして下さい。そして次にはもっと大きな責任をもつように導びいて下さい。能率のよい主婦は一から十まで自分でしません。自分の家庭を、家庭と家族生活とを改善する訓練のセンターと考え、家族の一人一人が計画を分担するように気をつけています。

次に家庭の仕事が円滑に行われ、予定通りに完成をみるためのくふうを少し申します。

「食事の計画を早いところすます。

置き場所をとりちがえた品をひろい上げ、

寝る前に居間を整頓する。

一つの時間に二つの事をするくふうをする。

パンを焼いているうちに、ほころびをつくろう。

両刀づかいになることをおぼえよ」

以上計画をするに当って、自分を改善する時間をほかから節約す

ることができるのを忘れてはなりません。ルイ・アガジス博士の講演を聞いたあとで、博士の提案したようなことをする機会は少しもありませんと言った主婦のことを聞いたことがありますか。この婦人はいつもいそがしがっていて、読書の時間があるように仕事をすますことができませんでした。その言葉によると、この婦人は毎日の大部分をジャガイモの皮むきに費やしていてひまがないというのでした。その時博士とその婦人とは次のような問答をしました。

「あなたはジャガイモの皮をむいているうち、どこに腰をおろしていますか」

「ふつう裏の階段のところです」

「その階段は何でできていますか」

「レンガです」

「どんな種類のレンガですか」

「存じません」

「あなたはその階段に何年腰をかけていらっしゃいますか」

「十五年」

「では、あなたに私の名刺をさしあげますから、レンガについてできるだけ調査をした上、私のところへ報告を送って下さい」

この経験がその婦人の生活を変えました。彼女はレンガについて研究ができるように自分の仕事を計画しはじめました。彼女はレンガについて辞書をひき百科辞典をよみました。町の図書館から本を借りてきて、レンガでできたどこにもあるものについていろいろの知識を得ました。それから、自分の知ったことについて、二十七頁の報告を書いてアガジス博士のところへ送りました。博士はこの報告に書いてあることを喜んで読み、その一部を自分の造っていた報告の中に使いました。

それから博士はこの婦人に小切手を送って「そのレンガの下に何がありますか」とたずねました。彼女は簡単に「アリ」と答えました。博士はおり返して「アリ」について研究をしてもらいたいと言いました。彼女は「アリ」の研究をするために田舎へ旅行をし、博物館へ行き、研究所をたずねて、「レンガ」のときよりもずっと長い研究報告を書きました。アガジス教授がこの研究結果を出版させて下さったので、彼女は幾冊もの本を買い、研究をするという新しい興味に役立つ授業を受けることができました。そしてとうとう、方々の国へ旅行をして、世界とそこに住んでいる人々のことを理解するのに充分なほどお金をもうけることができました。

主婦たる者は一人のこらず、一日が終ったときに今日も何か新しいことをおぼえたという感じをもつべきであります。すなわち一日前の自分よりも今自分はよくなっているということを感じなくてはなりません。主婦たる者は、自分が家族の中で一番興味の中心である人であって、もっと大きな仕事をなしとげさせるためにほかの人々によい考えを吹きこむことができるとするなら、常に自分をより良くするように努力しなくてはなりません。

考察のための考え

㈠人がその「将来」を支配する助けとなるために時間計画はどんなに役立ちますか。

㈡子供たちが家庭の中で各自の責任をもつように主婦が訓練を始めるのは、いくつくらいの時からするはずですか。

㈢時間の予定表のことを忘れてもよいのはどんな時ですか。

㈣家庭の主婦は、自分の家庭を良い組織の模範とするために、何に熟練していなくてはなりませんか。

公告

この度左記物件を東京都中央区銀座西八丁目五番地秀和株式会社へ売却することになりましたから、ここに公告いたします。

一、東京都渋谷区八幡通壱丁目参拾四番
境内地　壱反九畝弐拾七歩

二、東京都渋谷区金王町六拾八番の弐
宅地　拾七坪

三、東京都渋谷区金王町六拾八番の参
山林　拾四坪

四、木造瓦葺平家建　牧師館
建坪　七拾弐坪七合
外に地下室　弐拾九坪弐合五勺

五、同所附属
木造瓦葺二階建住宅
建坪　拾壱坪五合
外二階　六坪七合五勺

宗教法人　**末日聖徒イエス・キリスト教会**
代表役員　ダワエン・エヌ・アンダーセン

GOSPEL IN ENGLISH (Eigo no Fukuin)

George Washington's Jacknife. Adelaide K. Roeslein

(1) Had it not been for his jacknife, George Washington might never have been the Father of our Country.

(2) It was just an ordinary jacknife, just a "good knife for a boy." For so had his mother described it when she sent the order to London for it.

(3) George was still in his early teens and was then living with his beloved half-brother, Lawrence at Mt. Vernon.

(4) He wanted more than anything else in the world to join the British Navy, and Lawrence had made this possible. He had secured for him an offer of a commission as midshipman in the Navy. "Will you accept it, George?" he asked.

(5) "Will I? You bet I will," replied George eagerly. And then his enthusiasm faded. "That is, if Mother will let me."
"We'll see," consoled Lawrence.

(6) He sent a message to Mrs. Washington, and when the reply came back, George knew it was hopeless. His mother had refused her consent.

(7) George and Lawrence went to see her with a still more urgent request, but his mother insisted that she could not bear to have her son so far from home.

(8) But she knew how broken-hearted he would be, and so the white-handed knife she had ordered from London was her peace-offering and George's reward for obedience in accepting her decision. And when she gave it to him, she included a bit of advice: "Always obey your superiors," she said.

(9) As a little reminder of her words he carried the knife always in his pocket.

(10) Sometime later when he was at Valley Forge as commander of the army, he told General Knox, a general in his army, of the in-

cident about his knife.

(11) Was General Knox listening? And did General Knox remember the story? He certainly did!

(12) The following cold, tragic winter Washington's men were starving because of a lack of help from Congress. All of his entreaties had been ignored. His men were deserting, his officers resigning.

(13) Finally, in desperation and disappointment he sat down and wrote out his resignation to Congress. He called his men together and read the letter to them. They were thunderstruck!

(14) He was their moral support. His resignation meant to them the end of everything —— defeat!

(15) They protested loudly, but Washington was firm. He was sure that Congress had deserted him, and he was determined to make them appoint a commander that they would support.

(16) Finally in the midst of Washington's explanation, General Knox arose frome his seat. "General, have you foregotton your pocket knife?" he asked.

(17) Now it was Washington's turn to be thunderstruck. "What in the world did the pocket knife have to do with this decision?" he thought.

(18) But aloud he said, "What do you mean, General Knox?"

(19) "Well," replied General Knox, "did you not recieve that knife from your mother with the advice to always obey your superiors?"

(20) Congress has ordered you to command this army. Has Congress yet ordered you to relinquish your command?"

Washington stood in complete silence for a moment, and then suddenly tore up his letter of resignation.

(The Children's Friend, February 1956)

GOSPEL IN ENGLISH (Eigo no Fukuin)

(1) One of the sights which has been typical of Palestine from the beginning of its history is the shepherd leading his sheep as they graze over the hillsides and the stony plateaus of that ancient lands.

(2) Since the days of Lot, Ishmael, Jacob, and Esau, the appearance of these nomads has changed as little as the sheep.

(3) The shepherd of today, as in the centuries past, wears a cloak made of sheepskin or woven from wool, camel's hair or goat's hair.

(4) He wraps it about him as a protection from the burning rays of the desert sun and the cold of the night.

(5) Usually there is an inner pouch to carry all kinds of articles and large enough to hold a lamb when it needs to be helped over the rough places or is sick or injured.

(6) The shepherd's day begins at dawn. He calls to his sheep and gathers them about him. They know his voice.

(7) Unlike those who tend sheep in the western world by driving their bands across the ranges, the shepherds of the east lead the way and the flock follows.

(8) He leads them to the green pastures where they graze in the cool of the morning, and at midday he guides them to a spring or well for water.

(9) After a rest, he takes them back to the pasture ground. They follow wherever he goes and expect him to never leave him.

(10) If he is away from them, or if a stranger appears, they are terrified and thrown into panic.

(11) When the little lambs become tired and can not keep up with the older sheep, he carries them in his arms or in the pouch of his cloak until they get the needed rest.

(12) The shepherd constantly provides for the sheep throughout the day; and, as the sun commences to set, he leads them to the fold. They are counted so not one shall be lost.

(13) The sheep fold is often an enclosure of rock piled high enough to prevent the jackals or the wolves from leaping over.

(14) Sometimes it is a cave in the side of the hill where the sheep can be protected from the wild animals which prowl about and the thieves who come to steal.

(15) The shepherd stays at the entrance to the fold, alert to the danger of the night.

(16) On the night of the birth of the Saviour, it was to those who were tending the sheep that the angel made the announcement.

(17) The imagery of the shepherd as he leads his flock to the green pastures and the cool waters, protecting them from the thieves and wild animals, watching over them by night, helping the little ones over the rough places, and seeing that none strays away, makes clear to us what He meant when He said "I am the good shepherd."

(18) If we love the Lord and have love for others, the picture of the shepherd comes back to our minds as we think of His words, "Feed my sheep."

(The Instructor, Sept., 1962)

GOSPEL IN ENGLISH (Eigo no Fukuin)

(1) Nearness to an event tends to minimize its full significance and importance.

(2) Though the world is still near the great events that made the nineteenth an epoch-making century, yet so far-reaching and significant were the wonderful discoveries and inventions of the latter half of the century that they overwhelm us even in their nearness.

(3) In this first quarter of the twentieth century we are looking at these momentous realities only as observers, who, standing at the foot of a high mountain, see it only in part.

(4) Its majestic slopes, towering peaks, and relative position to surrounding ranges are hidden from view.

(5) Yet even our limited vision fills us with astonishment.

(6) Who, for example, can measure the material benefits to society of the steam engine, the cotton gin, the automobile, the telegraph, the telephone; or who can ever imagine the ultimate effect upon the human race of William Harvey's discovery or that of Louis Pasteur?

(7) But none of them has answered man's greatest need and man's most yearning desire.

(8) Not one has yet revealed that for which man has sought for ages. That need —— that ever-present yearning in man's heart —— is to know God, and man's relation to him.

(9) The microscope has not revealed Him; the telescope has not discovered Him; even radio has not yet penetrated His abiding place.

(10) Only one event of the nineteenth century claims to give to the human soul this answer.

(11) If in that event man finds the truth for which the human race has ever sought, then it truly merits the distinguishing tribute of the greatest event of the nineteenth century!

(12) That event was the appearing of two heavenly beings to the boy Prophet Joseph Smith, revealing the personal identity respectively of God the Eternal Father and of his Son Jesus Christ.

(Excerpts from the writings of President David O. McKay)

My Shadow Celia Larcen Luce

(1) As I walk in the sunshine I see my shadow. It follows along, falling on many things as I pass them. It is easy to see where my shadow goes.

(2) The shadow of my influence is a harder thing to see. A chance remark, a kindness or an evil deed —— these things fall on others and influence their lives. I can never tell where the shadow of my influence may fall.

(3) Since this is so, since I may help change the lives of others for good or evil without ever knowing it, I must be very careful.

(4) I must live as close to God as I can, following in his ways. Then my influence will not be like a shadow, but like a light, showing others the way.

(The Relief Society Magazine, August, 1962)

練習の讃美歌　一八〇番　二一一番

降誕祭が近づいてきました。

今日はクリスマスの歌を練習しましょう。

一八〇番の「ウルワシキ光」は、聖歌隊用に編曲されています。少々難かしいでしょうがメロデーだけでも練習しましょう。

曲のテンポと音符の長さに気をつけて、ゆっくりどうどうと歌うように、各段にフェルマーターがついていますが、その場合フェルマーターのついている音符の二倍の長さにしておけばよろしい。ソプラノとアルトは音符の長さとシャープ、ナチュラルのついている音符を正確に出すように気をつけましょう。

テナー、ベースは大変に復雑です。アクセントや、テンポに気を配って練習するようにしてください。

難かしい曲ですけど、美しい曲です。

二一一番

「なつかしい鐘はなる」の練習、この歌は前の曲と全然感じが違います。重くるしくなく歌って下さい。一月練習の歌は一四八番です

子供日曜学校　四三番

二部合唱のかわいい曲、三拍子で歌ってゆき途中から六拍子になります。そこを注意して下さい。

編集後記

そろそろ初雪の便がちらほらと、新聞紙面をにぎわしていますが、北は旭川から南は沖縄にまで支部を持つ私たちの伝道部、季節の話題を出すのに一苦労します。扉の写真は東京中央支部、上村陽子姉妹が撮って来た。東京の新宿御苑の並木、これに雪がかかるのが北海道、葉が繋っているが南の方の支部という所でしょうか。

▲十月のはじめに新しい伝道部長会が組織されました。すなわち第一副伝道部長に、吉野洋太郎長老、第二副伝道部長に清水長老、吉野長老は日本人最初の宣教師としてアンダーセン長老と共に各地に伝道され、以後、アメリカ、スタンホード大学に留学されて、今度仕事の関係で帰国されました。清水長老は巡回宣教師として活躍されていますので各地支部のみなさんに顔なじみの方と思います。両長老共、「聖徒の道」に非常に理解が深く、意欲を持っておられます。私たち編集部員も大いに張り切っているしだいです。

▲今月号も色々目新しい記事が載せてあります。編集委員一人一人が大変な意欲で原稿用紙に取り組んでいます。どうか読後感をお寄せください。

▲ちょっと一息に「蛙」と「音」が登場しましたが、この原稿を書いているのが、南支部の坂井兄弟と坂本兄弟、両坂兄弟共は南支部のハワイアンバンドの楽員、これから色々とおもしろい話が聞けそうです。

▲それにしても大失敗をやったのがMIAリーダー。執筆者から編集室に原稿が運ばれる途中で原稿を紛失してしまった。レッスンの原稿だけに、多くの人に御迷惑をおかけしたことをおわび申し上げます。そして心よく穴うめの原稿をくださった、佐藤兄弟、姉妹に心から感謝申し上げます。

▲さて十一月十二月は大変に忙しい月、十二月号と一月号を同時に出さねばならず、今から思いやられます。

▲しかし、やっぱり〆切日を必ず守ってほしいと思うのは、筆者一人だけでしょうか。各支部の支部だよりも十一月七日と十二月七日の〆切日を必ず守っていただきますようお願いします。なお写真ニュース用の写真もぜひ送って下さい。

（小林）

〆切日　毎月七日

月刊「聖徒の道」第六巻第十一号
一九六二年十一月一日発行
実価　一カ年　九一二円〒共
半カ年　四五六円〒共
一部　七十円
編集兼発行人　ダワエン・N・アンダーセン
発行所　東京都港区麻布広尾町十四
末日聖徒イエス・キリスト教会
北部極東伝道部

図書案内

教義と聖約
高価なる真珠
モルモン経　上質革製合本……1100円
教義と聖約
高価なる真珠　合本……300円
モルモン経（新訳）……200円
信仰箇条の研究……330円
モルモンとは？（新版）……150円
完成への道……200円
初等協会教科書……150円
総合聖句の手引……150円
日本系図探究要覧……100円
アロン神権者用学科課程……150円
メルケゼデク神権、教師と生徒用
「モルモン経の読み方の手引」……200円
ナザレのイエス……100円
正しい日本史……100円
家督権の祝福……100円
扶助協会手引……50円
求道者教育法……120円

日曜学校用

宗教と生活Ⅱ……150円
回復された神の教会……100円
福音の実践……150円
聖典中の指導者……150円
我等の標準聖典……200円
古代の使徒……150円
福音の紹介……200円
シオン山の救い手たち……200円
教義と聖約の教え……200円

MIA用

生活の目標……150円
モルモン経研究ガイド……100円
MIA・エンサイン・ローレルの手引……150円
演説が上手になる法……150円

讃美歌及び歌集

末日聖徒讃美歌（新版）……400円
子等は歌う……100円
レクリェーション歌集……400円

……注文は各支部長へ……

支部所在地

北海道地方部

旭川　旭川市八条五丁目
MIA集会場　旭川公会堂

室蘭　室蘭市幸町八九
電話（七〇五四）

小樽　小樽市富岡町一ノ三五
電話（二—八二二四）

札幌　札幌市北二条西二四丁目

東中央地方部

群馬　高崎市並榎町二七五

甲府　甲府市山田町六三

松本　松本市同心町六一二

新潟　新潟市中大畑町五五七　金井方
電話（二—八六六〇）

仙台　仙台市光禅寺通り二八
電話（五—〇八九七）

東京中央　東京都渋谷区八幡通一ノ三四
電話（四〇八—三三〇七）

東京北　東京都豊島区高田本町二ノ一四八七
集会場　日曜学校　武蔵野ドレメ
MIA　徳川生物研究所

東京東支部　東京都江戸川区小岩町四—一七五〇

東京南　東京都大田区南千束町二四九
電話（七八二—六一三一）

東京西　東京都港区青山北町六ノ三四
電話（四〇二—四〇一〇）

山形　山形市八日市八五〇

横浜　横浜市港北区篠原町二九
電話（四九—八七七二）

西中央地方部

阿倍野　大阪市阿倍野区阪南町中一ノ三八

福岡　福岡市東薬院二ノ四〇

広島　広島市古田町古江四〇〇ノ三
電話（三—六一二五）

金沢　金沢市成瀬町二ノ四　野田方
集会場　農業センター

京都　京都市左京区松ケ崎桜木町一四

名古屋　名古屋市昭和区北山町三ノ四一
電話（七三—四二一〇）

西ノ宮　兵庫県西ノ宮市仁川町四ノ五四
電話（五—〇四二一）

岡町　大阪府豊中市岡町北二ノ一八

岡山　岡山市浜字下六ノ坪五五三ノ四

三ノ宮　神戸市灘区篠原本町四ノ三五
電話（八六—二六〇二）

柳井　山口県柳井市今市三九一

沖縄地方部

普天間　沖縄宜野湾村野嵩区三二八

那覇　沖縄那覇市松尾区一三九

聖徒の道
一九五八年三月十七日
第三種郵便物認可　第六巻第十一号
振替口座東京七六二二六番
発行人　ダワエン・N・アンダーセン
編集人
発行所　末日聖徒イエス・キリスト教会
北部極東伝道部　東京都港区麻布広尾町十四